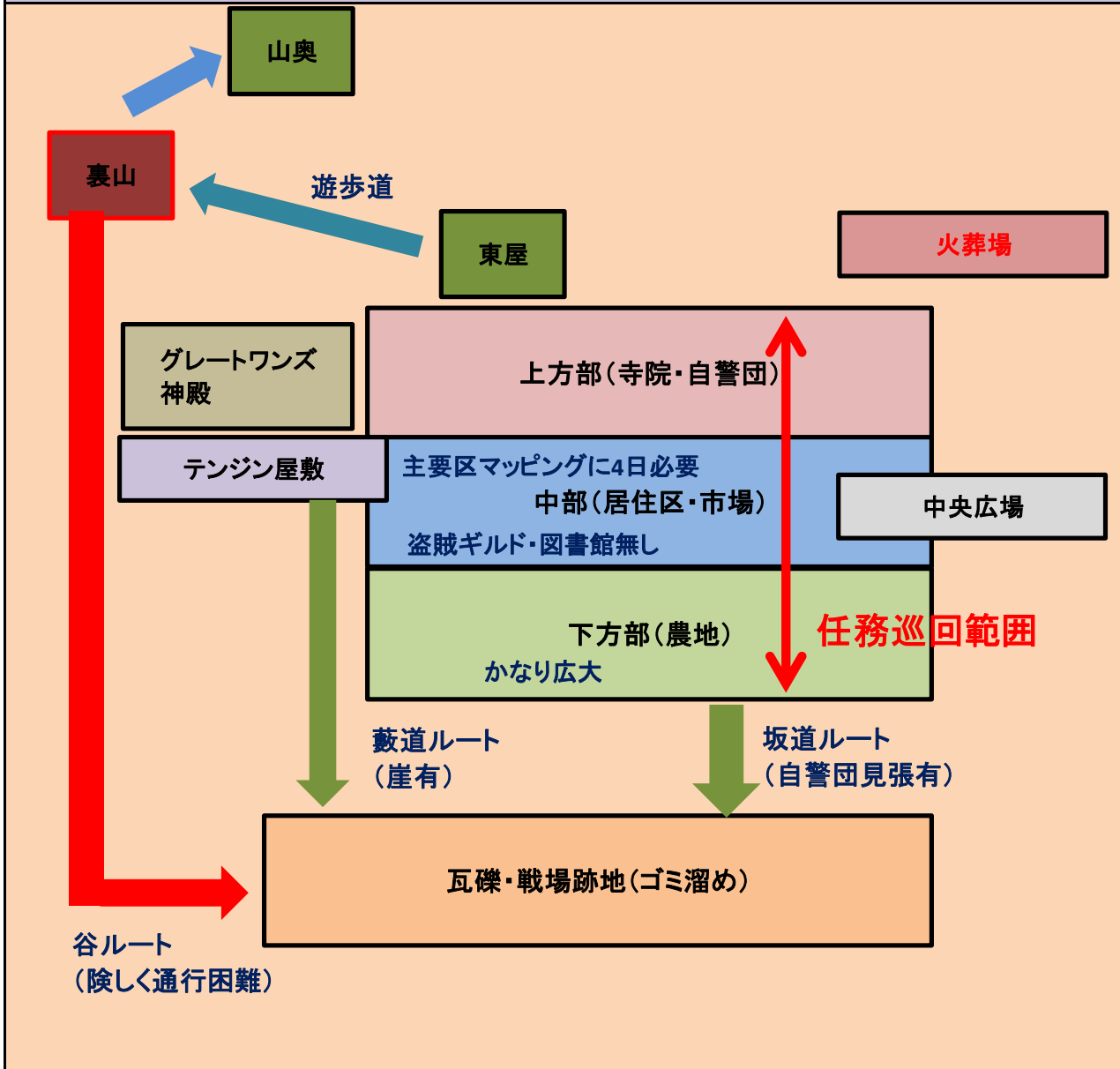


『騒乱のアムト』情報まとめ

アムトの街の構造概略



依頼内容

北帝国シンの南部に位置する都市アムト。

ここは**紛争地域**であり、都市とテロリストによる**内紛が絶えない**でいた。

流れる血と凶弾の銃声、市民の嘆きが、鳴り止まないこの街に、遂に安息の日が訪れた。

北帝国地方防衛軍の**ハン**という男が**和平交渉を実現**、**平和とまでは行かないが、これにより紛争は激減**。

後日、この功績と平和を讃えて、**終戦祭が行われる事**となった。

君たち冒険者は、その**祭りの警護の依頼書**を、今眺めている。

『終戦祭に伴い、ストリートの警護を依頼する。身元のチェックのために1週間前に現地入りしてほしい。詳細は現地にて話す。縮小化したとはいえ紛争が根絶されたわけではない。十分注意されたい』

なお現地は、一般市民以上は共通語を話し、下層市民は帝国語を話す。

ブリーフィング

- ・仕事の内容は**基本は警備だが、アムトは問題が多い。**
- ・時計塔で**銃が開発されてから、一般に普及するようになってきた。**資金さえあれば誰でも使えるものも出てきており、**戦争のありようが少しずつ変わってきている。**
- ・アムトに**シーフギルドがあるかどうかは分からない。**シーフギルドは善悪ではなく利益で判断するから、あまり信用しすぎない方がよい。
- ・種族についての概念は一般的。**宗教は仏門9割、グレートワンズ1割。**
- ・市民は、**【上流】【一般】【下位】に分かれていて、まともな生活をしているのは【一般】以上。**
- ・街には『**ゴミ溜め**』と呼ばれる、**スラム街的な場所がある。**
- ・武器や魔法についての法律は一般的な街と同様。(基本は使用禁止) **聖騎士も軍もないから、都市自警団と北帝国シンの地方警備が都市を管理している。**
- ・街を統治しているのは、**ロサン・ツーツァンという老翁。**
- ・今回の依頼者は**ロサン・ツーツァンの息子の自警団長。**
- ・あと**首席補佐官(一般的な大臣のようなもの)のチャンパ**がいる。
- ・アムトの統治機構で偉い人は上記の三人。
- ・三人が反目し合っているという情報はガルムのところには入っていなかった。
- ・(アムトの街はチベット地方のイメージらしい)
- ・現地アムトは、北帝国シンの首都ファミンへのポータルを經由して、駅馬車で五日ほどの距離。
- ・フラウとエフェミアはシーフスキルを使って人間に見えるように変装をした。(フラウは達成値15、エフェミアは達成値18)
- ・追加情報:現在の季節は春先

混沌のファミン

- ・神殿を出ると、そこは**繁華街**。露店や包丁片手の料理人たちが飯テロを仕掛けてくる**戦場**だった。
- ・フィミアは**仮装で上下藍色のクンフースタイル**になった。
- ・街に行きかう声を拾うと、**美味しいものを売り込む声**がたくさん。
- ・馬車の発着場は**繁華街から一時間ほど歩いた街外れ**にある。

繁華街

- ・フラウは、**饅頭や点心、焼き栗、海老の揚げ物**など良いものを買って込んだ。
- ・フィミアは**南部の民族衣装を着た少女が功夫姿の僧に捨て台詞を吐いているところに通りかかった。**
- ・フラウとテオは同じく馬車の乗合場に走っていく少女を追いかけながらクロウとエフェミアに合流しに移動。
- ・フィミアが僧に話を聞くと、**少女からクンフーを教えてほしい、一緒にアムトに来てほしいと言われた**ようで、発車まであと20~30分と突然すぎる頼みにさすがにできないと答えたようだ。
- ・アムトは別に**クンフーの聖地ではない**ようで、むしろ達人はファミンに多い。アムトにも文化はあるようだが、師範たちは内戦でそれどころではないかもしれないと僧は語る。師範は各道場にたくさんいる。**アムトは紛争が落ち着いたとはいえず、まだ戦闘が無くなったわけではない。**アムト行きの馬車も便が増えはしたが一日に二本と少ない。
- ・オーディンはフィミアに馬車に急げと叱咤を飛ばした。

馬車乗合場

- ・クロウとエフェミアは早めに馬車の乗合場に移動して他の客を観察。
- ・馬車の乗合場には馬車が三台待機。**一般人や冒険者風の客が発車を待っていた。**
- ・一般人の話題『**終戦祭なんて夢みたいね、ようやく故郷に戻れるんだわ**』
- ・冒険者の話題『**…おい、あそこにも冒険者っぽい連中がいるぜ**』『**ああ、かなり多数の組織に声をかけたようだな**』『**それだけ大事な祭ってことでしょ**』
- ・エフェミアは馬車待ちの客たちの顔を記憶する。
- ・発車を待っていると民族衣装姿の少女が慌てて乗り込んできた。(発車10分前)
- ・それを追うかのようにフラウとテオが合流。発車直前になって、**猛スピードで飛ばしてきたフィミアとルノア**が合流した。

馬車の道中 その1

- ・馬車三台に30人ほどが分乗して出発する。
- ・ホオヅキの冒険者が乗ったのは真ん中の馬車。一緒に乗ったのは少し身なりの良い一家。木枠で仕切られてプライベート空間になっている。話している内容を聞くと故郷に帰れる喜びと、停戦をもたらしたハンに感謝する言葉が聞こえてきた。
- ・ハンは人名であり、何か特別な地位についているわけではないようだ。一般的にはハン様、英雄ハン、調停者ハンなどと呼ばれている。
- ・ハンについて一般教養で考えてみるクロウとエフェミア。
- ・『この内紛は長年国が頭を悩ませていた問題。それを解決できたハンの功績は讃えられるべきであり、尊敬されるのもおかしな話ではありません。——しかし——役職も無く実績も持たない一兵卒が、あっさりと解決できるような簡単なものではありません。英雄級である君たちですら、相当の努力と試練が必要でしょう。それを一兵士が解決できたのは、類稀なる努力と幸運に恵まれていたのか、それとも……』
- ・民族衣装姿の少女を観察してみると、馬車が停車している間は一人で空を見上げたり、不格好な訓練をしたりしている。しかし訓練は長続きせず胸につけたロケットを開いて中を見て肩を落として馬車に戻る。そんな行動。
- ・少女の眩きを盗み聞きしてみた。『パ…(お父さん…)』
- ・テオが変な人を探すと、そこには少女に声をかけようとしたエルフが引っ掛かった。(おそらくエフェミア)
- ・タイミング的にいまいちだったのでエフェミアは少女への接触を次の停車まで先延ばしにした。
- ・その夜の停車では、少女を探すと他の冒険者からナイフの使い方を習っているようだった。ナイフの使い方はファイターかシーフレベル1あれば教えられる程度で、ストリートの子供でも知っている範囲だった。冒険者も談笑の片手間に教えている感じ。
- ・少女は争いごとに身を置いたことのない子供だと分かった。年齢は10歳くらい。一人旅のようで基本的には話にも加わらず一人でいるようだ。
- ・ナイフの使い方を教えていた冒険者が馬車に戻ったところで、エフェミアは少女に声をかけようとするが――

馬車の道中 その2

- ・エフェミアが少女に声をかける寸前に馬車の窓からエフェミアを制止する声が飛んだ。
- ・同乗していた身なりの良い老婆『あの子の目を見てごらんなさい。恐ろしい…。せつかく平和になったというのにナイフなんて…。関わりになるのはおよしなさい、お嬢さん』と、忠告された。
- ・クロウが改めて少女を見ると、**独りでナイフの訓練を続ける少女からは強い殺意と憎悪が伝わってくる。**ナイフの使い方も全力で握って振ったり突いたりを繰り返している。
- ・その日の接触を諦めたクロウとエフェミアは少女に接触するのは翌日にしようと馬車に戻った。
- ・翌日。春先の冷たい風が吹く中、馬車は丘に挟まれた峠を走っている。峠を登りきった先にアムトはあるようだ。
- ・この地方は、北帝国の中でも、**気候的に年中寒く、真冬の寒さは北海に匹敵する。防寒具が必要なほどではないが、寒暖の移り変わりも激しく、気候は安定しない。**
- ・木々もなく見晴らしの良い草原の丘。何者かに**馬車が襲撃された。**
- ・**反乱軍**だ、という声上がる。
- ・最初に出現したのは**馬に鉄の風呂桶のような形のそりみみたいな乗り物を引かせているモヒカン。**それが5体。さかんに銃を撃ってくる。襲撃する側もされる側も高速で移動しながらなので滅多に弾は当たらない。馬車を止めたら集中射撃されてしまいそう。
- ・馬車の中で派手に跳弾する。伏せる家族連れ。
- ・他の馬車からは冒険者が弓で反撃しているが、モヒカンたちが高所を取っていて牽制程度にしかなっていない。

襲撃

・馬車の高速移動中、揺れる車内(命中・回避・魔法達成-4。足場ペナ軽減スキル使用可能。セイラーの船上戦闘はレベル半分だけ適用可能)で、相対距離50mという戦闘となる。

1ターン目

- ・エフェミアがライトニングスネークで三人のモヒカンを撃破。直接モヒカンを狙ったため、モヒカン自身へのダメージはそれほどなかったが、威力があったため鉄の器を焼いて、牽引に使っていたロープが切れ驚いた馬が暴れて脱落。
- ・クロウが迅雷で一人のモヒカンを撃破。迅雷は真上からの攻撃になるので、鉄の器が遮蔽物にならなかった。
- ・一人残ったモヒカンが闇雲に撃ってくる。テオに当たりそうになったが回避成功。
- ・同時にフラウとルノアが反対側からの殺気を感じる。フラウは同乗した一般家族の盾になり、ルノアはその巨乳を活かして御者の盾になった。テオは一瞬のうちにルノアを回復すると仕事を放棄した御者に代わり馬車を動かした。ここで馬車の揺れによるペナが消失する。
- ・反対側からの攻撃で幌が外れて様子が見えるようになる。そちら側には6人のグレートモヒカンたちが、多少良い装備で50mの距離を取って追走しつつ撃ってきていた。
- ・先頭の馬車から人が落ちて岩に激突したのが見えた。

2ターン目

- ・フラウが騎士宣言をするがモヒカンたちに声が届かない。自己バフのみ適用となった。
- ・クロウは迅雷で追走してきていたモヒカンを脱落させた。
- ・ここでテオが馬車を操ってグレートモヒカンたちに馬車を接近させる。相対距離20m。
- ・フラウが馬車の一番後ろに移動してグレートモヒカンたちにダークバーンで攻撃。
- ・さらにルノアがグレネードを投擲。グレートモヒカンたちを爆炎がつつむ。
- ・ここでモヒカンたちは撤退していく。しかし、まだまだ数がいるようだ。戦闘終了。

逃避行

- ・他の二台の馬車は馬に無理をさせつつ全速力で逃げて行った。
- ・馬車は無茶な運転と被弾でダメージを受けてはいるが無理をさせなければ何とか使えそう。深刻なのは馬の方で疲労が激しく無理をさせると骨を折리카ねない。しかし、馬のダメージは魔法ではどうにもならず休ませるしかない。(不眠ダメージのように休まない限り回復不能)
- ・テオの運転でいったん引き返して落ちた人を拾いに行く。落ちた人は一人だけなので収容するくらいはできるだろうという判断。元の御者は助けたことに感謝しつつも、戻るのに反対する。フラウが身を挺したおかげで家族連れも無事だった。しかし平和になんかになっていなかったと悲嘆にくれる家族。
- ・落ちた人はすぐに見つかったが、テオが駆け寄った時にはすでに死んでいた。御者をエフェミアに交替する。遺体を収容して再び馬車を走らせる。
- ・しかし、しばらく進むと先行した馬車が横転していた。馬が骨折した状況と思われる。馬は横倒しになった馬車の下敷きになっていて、馬車も車体が割れていた。
- ・クロウが幌を引っぺがすと、件の少女が出てきた。大した怪我はしていないようだった。壊れた馬車を力で撤去。少女以外は先に行ったという。クロウが少女の傷を癒し、荷物を掘り出して新たに少女を収容して馬車を再発進させた。
- ・襲われた時のための避難所もないようで、とにかく街まで急ぐしかない状況。アムトへ向かって馬車を進めながら御者と世間話をする。
- ・風呂桶じみたそりは一般的に使われているらしい。街中の移動や物資の運搬のために小型の馬車として使われる。馬が一頭いれば使えて鉄製で頑丈だが、馬が暴れるとロープが切れて吹っ飛ぶのが難点。
- ・これでも襲撃はだいぶ減ったらしく、以前は襲撃が日常茶飯事だった。ハンのお蔭で運が悪いと遭遇するという程度に収まった。
- ・荒らされると分かっているても作物を育てないと餓えて死んでしまう。飢え死にするか殺されて死ぬか。それは今に始まったことではない。しかし、ハンのお蔭で運が悪ければ死ぬという程度に収まった。ハンは神様だ。
- ・ハンはマレーンから持ってきた最新の装備で反乱軍と自警団との争いを止めに入り、お互いの話をする場を設けた。さらに国(北帝国シン)からも支援物資を貰っているようだ。
- ・反乱の元々の原因は、何年も前のゴミ溜め(スラム)に住んでいた人たちの不満から始まったという。しかし、それももうすぐ終わると御者は安心していた。
- ・もうハン一人に負担を押し付けることもない。自警団は活発に動いていて暴徒の鎮圧も時間の問題だと御者は期待している。
- ・そんな御者とエフェミアの会話を聞きながら空を見上げている少女。うわの空で雲を見上げている。お腹の音が鳴ったフラウに干し肉を差し出すが、フラウがファミンで買い込んだものを差し出して、二人で半分こにして食べた。しかし少女は何か気がかりがあり会話に集中できていない様子。
- ・少女の名前はメイリンだった。悩み事があるという。

弟子入り

- ・襲撃を受けた日の夜、メイリンが話し掛けてきた。**戦い方を教えてほしいと言うメイリン。**
- ・メイリンはファミンに戦い方を教えてくれる人を探しに行っていたという。父を殺した反乱軍の男を殺したいからと語るメイリン。父を殺したのは白髪で頬に傷のあるハイエナのような男らしい。
- ・相手の殺し方をおぼえたいというメイリン。希望の武器はナイフと銃。**銃はアムトにいくらでもあるという。ナイフは父の形見があるという。**ナイフの使い方は、昨夜冒険者に教えてもらった全力攻撃のみ。複雑な表情をするフラウ。
- ・父の仇を殺したいというメイリンの言葉に嘘はなかった。**命に代えても殺したいという。**
- ・ナイフの形に違和感を感じる冒険者たち。誰かに弟子入りするという条件でナイフを見せてもらうことに。
- ・ルノアが名乗り出てメイリンの師匠になることになった。複雑な表情のフラウ。
- ・ナイフを鑑定するとヴェノムナイフというものだった。
- 【**ヴェノムナイフ** 刃の部分がソードブレイカーのようにギザギザしていて、万能に使うナイフやダガーと異なり、**毒殺や暗殺に特化したナイフ。返しがついていて抜くことも困難であり、危険なナイフ。殺傷を目的としたものと推測される。ポイズンダークにも似ているが、こちらは投擲できないし使い捨てにするもの。致死性の毒を塗って刺すのが一般的な使い方。希少性はないが、一般的な武器ではない**】
- ・メイリンの父は農家で山菜や果物を作って売っていた。以前は自警団にいたらしいがメイリンが生まれた時に辞めたという。
- ・メイリンをルノアに任せて、他は少し離れた。
- ・メイリンが復讐するのには反対なフラウ。しかし、メイリンを放っておくと仇討ちに失敗して死んでしまう。だからメイリンを守るために戦い方を教えなければならない。軽い訓練のようなことをしながらクロウとエフェミアは今後の方針について話し合う。メイリンの父が何者であったのかについての推測。ともあれ、情報の共有と周囲の敵味方の見極めが必要。
- ・一方のルノアとメイリン。**街に着いたらメイリンの家に招いてもらえることに。**部屋はいっぱい空いているという。やはり富裕層なのか。ホオツキの冒険者はルノアの愉快的な弟子たちということに。メイリンはルノアの特訓を受けることになるが……

アムトへ到着

- ・翌日の朝から馬車を走らせると、山の上の石造りの都市に到着する。
- ・山脈を利用して作られた都市は高低差があり、上のほうには都市の長がいる寺院や、仏門の神殿、慰霊碑などがあり、中腹には出店や一般市民の生活の場が広がっている。神殿は華美でマニ車も見える。下方には平坦面が多く、そこで農業などを営んでいるようだ。下層市民はさらにその先の、瓦礫や戦場跡地に住んでいるようだ。外観は比較的手入れされているのか、目立った傷跡はないが、農業地帯の奥は遠目に見ても、焼け野原になっていたり瓦礫があったりで、あまり手入れはされていないようだ。
- ・アムトはそこそこ高地にあり寒い。吹き抜けの風が起こることがままある。路面に巨大な足跡はなく綺麗に整備されている。見れば農業地帯と居住区を行き来する風呂桶ソリが見える。物資や野菜を運搬しているようだ。自警団も銃や鎧を輸送するのに使っている。かなり一般的なようだ。
- ・馬車に乗っていた一般の家族は無事に到着したことに安心して、銃弾から守ってくれたフラウを中心にお礼を言って街に消えて行った。
- ・そして、馬車が到着したしばらく後に馬に乗った自警団の男が近づいてきた。その男に気付いたメイリンが手を振る。テンおじさんというらしい。テンはメイリンを力強く抱きしめると、馬車が二台戻ってこないから捜索に行くところだったと明かした。再会を喜ぶメイリンとテン。
- ・テンの本名はテンジン。三十歳前後の物腰の柔らかそうな男。茶髪で、メイリンの追っている仇とは違うようだ。メイリンは叔父と呼んでいたがテンジンはメイリンを娘として扱っていた。テンジンとメイリンの間には信頼とよそよそしさが同居したような複雑な空気が流れている。テンジンは身寄りのなくなったメイリンの父代わりになったようだ。
- ・テンジンの装備は布製の防具に要所で鉄のプレートが埋め込まれた最低限の防御と機動力の維持に主眼が置かれているもの。アムトの都市の紋章が肩に描かれている。武器は腰にサーベルを提げていて、懐にも何か隠蔽して持っているようだ。(拳銃と思われる)
- ・テンジンはメイリンから聞いた話(ルノアの食べ歩き発言から)で、ホオヅキの冒険者を観光客だと思い込んでいる。何か考えがあるかと思い調子を合わせておくエフェミア。
- ・襲撃については後で話すことにして彼の(メイリンの)家に案内される。
- ・街の中央の広場に簡単な看板がありそれが案内図になっているようだ。
- ・テンジンも他の自警団員も市民はにこやかにお辞儀をし、自警団員も市民には優しく対応している。
- ・一般エリアの市民も共通語の教育は受けているが普段は帝国語を使っている。
- ・テンジンの家は街から少し外れたところにある二階建ての豪邸。下の農地までは坂道を下って一直線。高級住宅地なのか綺麗に整備されていて物乞いもない。
- ・終戦祭は一週間後。

テンジンとメイリンの家

- ・二階は好きに使っているとメイリンに言われて思い思いに部屋を選ぶホオヅキの冒険者たち。
- ・テンジンによると、今は各地から集まった冒険者の登録と身元確認をしているという。テンジンはその役目があるので自警団に戻る。それが済んだら自警団長と戻ってくるようだ。
- ・時刻は昼。夕方までは登録作業をしているようだ。メイリンによるとグループの割り振りやら警備エリアの割り振りやらをするらしい。
- ・メイリンは早く修業がしたくてうずうずしている。ルノアは反乱軍のことを聞こうと話を振る。メイリンは父が殺された時のことしか知らないという。豪邸の庭でナイフの訓練を始めるメイリン。
- ・メイリンがルノアを離さないで、ルノア以外の全員で自警団に登録に向かう。
- ・ルノアはメイリンと父が殺された時の話をする。
- ・5年前に父とメイリンとテンジンとでトウモロコシの収穫をしていた時。メイリンとテンジンと鉄器(風呂桶ソリ)にトウモロコシを積んでいた時に銃声が聞こえた。銃声を聞きつけたメイリンとテンジンが駆けつけたら白髪に頬に傷のある男が父に銃を突き付けていた。その状態で何か話をした後で(殺された。とはつきり言ったわけではないが)
- ・メイリンの父を殺したのが白髪で頬に傷のある男というのは間違いない。
- ・メイリンには何故父が狙われたのかはよく分からないようだ。
- ・メイリンには毒の知識はないようだ。精々馬の糞くらいしか思いつかない。
- ・銃は簡単に入手できる武器だが、それはあくまでフントロックに限定される。ルノアのリボルバー(ソードカトラス)への反応が薄いメイリン。
- ・自警団に銃はたくさんあるからテンジンにお願いしてちょいちょいっと！(メイリン語る)
- ・(復讐計画は)きっと話せばわかってくれる！(メイリン語る)
- ・メイリンのナイフさばきは、思い切り振りまわすだけ。当たれば怪我をする程度。斬る・刺すの基本動作はできている。
- ・メイリンはメイン武器をナイフにしようということにした。ナイフを振り下ろすのと決め台詞の練習をする師弟。

自警団詰所へ移動

- ・街の中央広場は目立つ場所にあったのですがすぐに見つかった。岩に絵を彫った看板があり、略図ではあるが簡単な位置が分かるようになっている。
- ・街は寺院がある上方部、居住区と市場のある中部、農地がある下方部に分かれている。自警団の詰所は上方部にあるようだ。倉庫のエリアは特に描かれていないようだ。
- ・上方部に行くために手入れされた石階段を上がっていく。
- ・赤く塗られた柱の回廊を通り、曼陀羅が描かれた壁の間を抜けて、茶毘に伏すための火葬場として使われている山が裏手に見える。無数のお香がたかかれていて、その近くにはカラカラと回る筒のようなものが周囲を囲うように置かれている。アツマで見るとは何倍もスケールが違い、僧衣を着た僧侶たちが厳かに歩いているのが見える。
- ・周囲には雰囲気合っていない異国風の者もいる。おそらく雇われた冒険者たちだろう。
- ・周囲の会話を拾う。
冒険者その1「あー、めんどくせえ、こんなルールなら来ないほうがよかったかもな」「仕事でしょ、そういう依頼なもの」
冒険者その2「おい、あれ見ろよ。女の人も髪の毛剃るんだな」「えー、やだなあ、こっちで生まれなくてよかったー」
兵士「境界付近で反乱軍が出たらしい。」「ああ、その場に居合わせた冒険者が対応してくれたんだらう？その人たちが護衛の依頼を受けてくれたら、心強いんだがな」
- ・寺院の内部構造を覚えようとしたエフェミアだが、仏門に詳しくないため、どれも似たような部屋に見える。
- ・詰所には冒険者がたくさん集まっている。見た感じそれほど強者は来ていないようだ。道中で命を落とした冒険者もレベルで言えば3程度だろう。
- ・詰所の中にはテンジンともう一人資料を取りまとめている二十代ほどの黒髪のイケメンがいる。
- ・詰所の壁には緊急用の武器としてサーベル、ハルバード、シールド、ヘルムなどがある。あくまで緊急用のようだ。銃などは奪われるのを警戒して置かれていない。

面接

- ・ホオヅキの冒険者の番が回ってくる。冒険者たちの姿を見て驚くテンジン。只者ではないと思っていたが、メイリンからルノアと愉快的な弟子たちの強さを聞いていたのでスカウトできないかと考えていたらしい。
- ・イケメンは団長だった。名前はドマ。ホオヅキの噂は聞いているらしい。
- ・自警団では冒険者を装って入り込んだ者が内部工作することを極端に恐れている。この場に来れなかったルノアは現状では登録できないようだ。
- ・反乱軍のリーダーはウォンと名乗っている白髪で頬に十字の傷がある男。メイリンの父を殺した男でもある。
- ・テンジンにお願いしてメイリンの父のことを後で場所を変えて教えてもらうこととした。何かの手掛かりになるかもしれない。
- ・反乱軍の規模は自警団が把握しているだけで数百人規模。
- ・自警団の話聞いて辞退した冒険者はいない。
- ・過去の事件記録の閲覧は不可。質問があれば回答する。
- ・反乱軍の言い分は生活の質の向上と差別の撤廃の要求。反乱軍を構成するのは現在の都市の制度に不満を持つ者たち。
- ・祭の当日にはハンを中心としたパレードがある。パレードのコースも日程も秘密。
- ・ここでいったん冒険者内での相談のために退出する。

警備の決まりごと

- ・身元確認後宿泊先に連絡。有事の際はパレード中以外でも依頼をする可能性がある。
- ・基本的に警備は終戦祭の三日間のみ。それまでの準備期間は非常時以外は自由行動。
- ・警備の際は自警団員一人とランダムに割り振った冒険者二～三人でグループを作って巡回をする。緊急時の連携よりもあらかじめ定められた場所の巡回をするのが主眼。
- ・巡回時の監視には難しい連携は必要ないという判断。
- ・基本的にすることは決められたエリアの巡回。しかし、準備期間中に反乱軍の暴動の鎮圧に協力を要請することはあるかもしれない。この場合は別口の依頼として扱う。反乱軍も戦力を集めていて一度暴動が起こると被害が大きい。
- ・冒険者を装って内部に入った者が内部工作をするのを防ぐために互いに監視するのが目的。同じパーティの人間が同一グループになることはない。(PCも確実にバラバラになる)
- ・どこを巡回するか、1シフトがどのくらいの長さになるかは当日にならないと分からない。
- ・巡回中に騒動に行き当たったら基本的にそのエリアの部隊が対応する。陽動ではないと判断するまでは他の部隊は待機となる。
- ・鎮圧手段は任意だが、一般市民への被害を出さないことが優先。反乱軍の生死は問わないが、可能な限り殺したくない。魔術や爆発物も使用可能。
- ・警備する範囲は、上方部の寺院から下方部の農地まで。農地から先へは危険なのでいかにしようとしてほしい。トラブルに巻き込まれて巡回が乱れる恐れがある。
- ・有事の際には基本的にその場にいる自警団員の指示に従うこと。明らかに判断が間違っている場合はその限りではない。
- ・巡回は徒歩で行う。
- ・祭に限らないが寺院内部は立ち入り禁止。
- ・祭りの当日はハンを中心に市街でパレードを行う。しかし、ルートも日程も当日まで知らされない。パレードによる急な予定変更はなく、パレードによるシフト変更はない。
- ・自警団の補助に採用されると当日までに身分証のようなものが貸与される。

いったん相談

- ・会議室代わりに宿を借りて相談をする。
- ・その場にいなかったルノアを含めてもう一人くらい**自警団から離れて自由に行動できるメンバーを残した方が良いという話になる。**
- ・自警団から疑いをもたれないように身元調査はしてもらうことにする。
- ・話し合いの結果、**テオが(場合によってはクロウも)自警団から離れて行動することになった。**

採用辞退

- ・再び自警団の詰め所に戻ってきた。さきほど退出してからあまり人は集まっていないようだ。
- ・**一部参加しないことにするという申請はあっさり通った。**
- ・人数の多寡はあまり気にしていない様子。集まった人数で間に合わせるという雰囲気。
- ・ドマの貴重な戦力が少し欠けるのは厳しいが強制できないから承知したという意味の言葉に嘘はなかった。逆にクロウが疑われている様子。
- ・メイリンを助けた恩人ということで、**ホオツキの冒険者たちには信頼というよりも期待が寄せられている。**
- ・**登録するのは、クロウ、フィミア、フラウ、エフェミア**となり、一行は街に戻った。
- ・**見れば街の治安はむしろ良いくらい。**内乱が軽減されて平和に暮らしている様子。
- ・**ゴミ溜めはまだ通っていないので様子が分からない。**
- ・街でパフォーマンスしているバードはいなかった。

テンジン屋敷の夜

- ・ホオツキの冒険者をスカウトする必要もなくなったのでドマは来ないことに。
 - ・テンジンは戻ってくるとメイリンをお風呂に入れてる間に夕飯の支度。手伝うエフェミア。
 - ・テンジンは結婚しておらずメイリンと二人暮らしだった。**メイリンの母は父よりも先に病死している。**
 - ・**メイリンに武器を持たせないで欲しいと言うテンジン。**
 - ・復讐の果てに安息などない。メイリンにウオンの命を背負って生きてほしくない。
 - ・**憎しみに駆られて人を殺したら、一生人を殺したという自責の念を背負うことになり一生それに縛られる。メイリンに死ぬ覚悟はあるが、人殺しとして生きる覚悟は無い。**復讐を遂げたら晴れ晴れとした心になれると思っ込んでいるようだが、そうなることはない。
 - ・メイリンは心優しいから憎しみも強い。冒険者が仇を討ったらメイリンが普通の女の子に戻れるかどうかは分からない。ホオツキの冒険者には任務があるから無理はしてほしくない。**ウオンを討つときが来ればテンジンがやると言う。**
 - ・**メイリンのことはホオツキの冒険者に託す。**しかし、テンジンは強くないかもしれないが**兵士で誰よりも先に戦い家族と都市を守る責任がある。**メイリンもそれをわかっている。わざわざ死ににいきたくはないが。
 - ・そんな話をしながら夕飯の用意ができる。
 - ・夕飯の食卓では、街や文化についての当たり障りのない話題が出る。食の権化と化すルノア。
 - ・各自入浴してメイリンが寝入った頃、外に出て崩れた瓦礫に座って岩をテーブル代わりにして紹興酒を飲み始めるテンジン。
 - ・テンジンは夜風に吹かれながらメイリンの父に想いを馳せる。
- 『…お前がいなくなってから5年、ようやく争いが終わる。そうすれば、メイリンもきっと…』
- ・メイリンの父について聞きたいことが有れば答える体勢のテンジン。

テンジンと飲む

- ・メイリンの父の名前はヤンだった。
- ・ヤンはテンジンと同様普通の兵士だった。メイリンが生まれたので自警団を辞めたという。嘘ではないが言葉を選んでる様子。隠し事があるようだ。
- ・ヤンが殺された理由は分からない。テンジンも不審に思って調べた。反乱軍が人を襲うのは珍しいことではない。しかし、語尾を濁して結論を言っていない。
- ・5年前、ウォンは既に反乱軍のリーダーだったようだ。テンジンも古いことはあまり分からないという。
- ・反乱軍ができたのは、生活の質の格差と差別がきっかけという。
- ・メイリンの母が病気で死んだのはメイリンが生まれた直後だった。
- ・反乱軍が決起したのは数十年前だった。
- ・テンジンが紹興酒を振る舞ってきた。独特の味。
- ・下層階級は居住区に入ってこれない。市場もないので日々の生活は困難だろう。
- ・ヤンとハンの間には関係はない。ヤンが死んだのは5年前、ハンが台頭したのは最近のこと。嘘は言っていないようだ。
- ・ウォンがいるのは下層のどこか。位置は特定できない。
- ・ヤンだけが殺されたのは、テンジンとメイリンが隠れていたからだろうというテンジン。理由があるかもしれないが、反乱軍が人を襲うときに理由があることはあまりない。
- ・ヤンのナイフが暗殺者仕様だった理由はテンジンにも分からない。ナイフはヤンの部屋にあったものをメイリンが見つけたい。テンジンも普通のナイフとは違うと分かったが、それから先は…(再び言葉を濁す)
- ・防衛戦力についての冒険者の数や周辺地理については、審査が通れば知らせがあるはず。テンジンの口からは言えない。
- ・ヤンは養子だった。ファミンからアムトに流れてきてテンジンの父に拾われたという。それ以来テンジンの兄のような存在になり、良くしてくれたという。
- ・メイリンの母とテンジンの間には(義姉以上の)縁は特になかった。
- ・聞くところかきりのあることが無くなったので、テンジンとヤンの思い出話を聞く。一緒にトウモロコシ畑に盗み食いに入った話や、ヤンに恋人ができた時の話、メイリンが生まれた時の話など。しかし、特に核心に近い話はなかった。

アムト探索その1

- ・翌日、アムト市街地でシーフギルドを探し回ったエフェミア。市街地にはシーフギルドはないという結論に達した。
- ・本気で街の全域を歩き回するには数日かかりそう。
- ・祭りに使いそうな主要区を歩き回るなら一日。主要区のマッピングには3~4日かかりそう。(要シーフ)
- ・テオとフィミアは寺院を見る。相変わらずの厳かな雰囲気。冒険者は減って修行僧や自警団が増えた感じ。
- ・巡回ルートを行こうとしたが、まだ巡回ルートはできていない。
- ・農地は街の何倍もあるわけではないがかなり広い。果樹園・畑・水田・酪農場などがある。
- ・一番繁盛している主要な道を歩き回るテオとフィミア。ことさら手を繋いで仲の良いところを通行人にアピールしながら、買い食い、ショッピング、側道の位置把握などで土地勘を養う。
- ・クロウは200前後の軍が街を攻略するとしたらどうするかを考えながら街を散策する。
- ・ルノアはメイリンと農地で銃の特訓。メイリンがソードカトラスで射撃練習するが腕が発射の反動に負けて弾の方向が定まらない。
- ・フラウは街を散策しながら屋台で豚串を買ってくる。路地裏をチェック。寺院より高い建物は火葬場くらいしかなかった。
- ・思うように情報が集まらない。一筋縄ではいかない印象。
- ・自警団が内部犯を極度に恐れている印象。

アムト探索その2

・一度、ルノアとフィミア以外の四人でゴミ溜めに出かけようとするが、GMの確認が入ったので慌てて取りやめに。

・図書館を探しに行きかけるが、**図書館がないどころか街には紙媒体が出回っていない**。石板が使われている。識字率も低いようだ。住民は情報を井戸端会議で知るしかないらしい。

・クロウは散策を続行。**アムトを攻略するなら、下から攻めるのは難しく正面衝突となる。並の考えでは攻略は難しい。**

・エフェミアは**反乱軍の情報を得るためには、危険を覚悟で下層地区に行くか寺院に忍び込むしかない**と思った。居住区では反乱軍の情報は手に入らなそう。

・フラウとエフェミアは屋台に噂話を集めに行く。屋台のメニューは日替わりで豚串ではなく焼き魚が売られていた。

・ウォンは人を殺すことを何とも思わない恐ろしい男。**テロは農地で発生するとは限らないがゴミ溜めに近いので農地が多い**。自警団も見張りや見回りをしている。**夜半や郊外への襲撃もある**。

・反乱軍の襲撃があると屋台の仕入れも減るが軍からの差し入れもあり物資にはあまり困らない。

・**ハン**は実は**ファミンから来た国軍の人間**で、装備からなのか人柄からなのか、**鋼翼【アイアン・ファルコン】と呼ばれている**ようだ。意外とハンは街にも繰り出しているようだ。**焼けた肌に丸坊主、ちょび髭の男**らしい。

・フィミアとテオは寺院に向かう。寺院では自警団員が整列している。その中にはドマとテンジンの姿も。様子を伺っていると**寺院から白髪の老人(市長ロサン・ツーツァン)と小太りの人相悪いおじさん(チャンパ)が出てくる**。白髪の老人が前を歩いている。二人は寺院のどこかへと向かった。二人を送るかのよう銅鑼が鳴ったりしている。**仏間で瞑想(食事も睡眠もとらずに丸二日己と対話を続け悟りへの道を開く)に入るとのこと。数日は出てこない**らしい。自警団は市長が移動するときには必ず整列をして見送る。敬意の証らしい。

・もし、**市長が死んだ場合、次の市長は神仏の啓示によって決まる**らしい。

・口を滑らせてドマと陰悪な雰囲気になるフィミア。

・**市長が瞑想するときはずっと違う堅い警備シフトになる**らしい。巡回ルートは決まっているとのこと。(終戦祭での巡回ルートではなく普段の巡回ルートのことと思われる)

・戻ってこないルノアとメイリンを心配してクロウとフィミアとエフェミアが農地の方へ探しに出る。**歩哨に話を聞くがルノアやメイリンのような背格好の人間は見かけていないし報告もない**という。そのまま搜索をする。

・フラウとテオがテンジンの屋敷で待っていると、夕方からしばらく時間が経ってからメイリンが戻ってくる。それからしばらくして、クロウとフィミアとエフェミアが戻ってきて、テンジンも戻ってくる。

・夜中を過ぎても戻らなければ搜索をしようとしていたところでルノアが戻ってきた。

・**ルノアから明かされる偵察結果。下層にも広く出回っているフイントロックガン。銃器や火薬はどこから供給されているのか？**

ゴミ溜め偵察

- ・ルノアはメイリンと街に出る。市街地に怪しい場所はなかった。怪しい場所と言えればメイリンも行ったことはないがゴミ溜め。そのメイリンの言葉に背中を押されるようにして二人はゴミ溜めに向かった。農地の裏では自警団があちこち見回りをしている。メイリンが知っている裏道を通して自警団との鉢合せを避ける二人。
- ・農作業の合間に遊び回っていたメイリンが見つけていた藪の中の秘密の道を通してゴミ溜め近くの崖の上に出る。崖は高さ20m。歩いて降りられる坂道もあるが、そこには自警団の見張りがある。
- ・ゴミ溜めは家畜の死骸や堆肥のあまり・糞束など農業廃棄物がたくさん捨てられていて悪臭がひどい。ずっと先には瓦礫と廃材で作られた集落がある。よそ者は信じてもらえないという。
- ・ロープと受身の技を使って降りたルノア。しかし落下音を浮浪者たちに聞かれた。浮浪者たちはフロントロックガンで武装している。なんとか隠れてやり過ごしたが、メイリンに大声で伝言を呼びかけたのでやっぱり浮浪者たちに気付かれた。隠れはしたものの浮浪者たちは警戒態勢になる。
- ・浮浪者たちはへまをしたらウオンに殺されるらしい。
- ・隠れて集落の方へと移動するルノア。集落には活気がなく、木の実や魚を獲って生活しているようだ。老若男女の区別なく武装している住民たちは警戒態勢。銃器の数が多いがモヒカンはいない。鉄器もあまり走っていない。10歳くらいの子供たちも銃やナイフの訓練を受けている。嫌々訓練を受ける子供たち。ウオンへの不満を漏らすと殴り倒され、折檻を受ける。
- ・殴り倒された子供から話を聞こうとするルノアだが、人目もあり話しかけられない。子供の後をつけて住居まで移動して話を聞くことにしたルノア。子供は崩れかけた石造りの家に入る。家の中からは呻き声と泣き声が聞こえてくる。
- ・家の中に入って少年に話しかけたがとても友好的とは言えない。ルノアが雇われた冒険者だと気づく少年。
- ・ゴミ溜めの住民はウオンは嫌いだがそれ以上に街の住民や外の人間は嫌いらしい。ウオンが来てから争い事や危険なことが増えたという。しかし、恐怖で支配するウオンに従うしか生きる道はない。だからウオンに従っている。
- ・ウオンを殺すと言うルノアだが、ウオンが殺されたら次は自分たちが全員処刑されるという少年。ウオンを殺すと言ったからにはルノアは敵だと認定される。騒ぎを起こして目を付けられたくないからルノアに去れと言う少年。
- ・シーフギルドはないかと聞くルノア。少年はシーフギルドの概念を理解できなかった。冒険者が来ることのないゴミ溜めにシーフギルドは存在することができないと悟るルノア。裏の組織はあるだろうがそれは冒険者に利用できるものではないようだ。
- ・そのまま少年と分かれて何とか市街地の方へとルノアは戻ることができた。途中で集落の奥の方に鉄器や銃器がたくさん集められているのを見た。

敵襲

- ・夜明け前に鳴らされる銅鑼の音。召集の合図だろう。
- ・メイリンを守るために残ったフィミア以外は出撃するテンジンについていく。
- ・鉄器で出撃。カーブでは強い遠心力がかかる。
- ・敵襲があったのはテンジンの家から街を挟んだ反対側。あちこちから鉄器が集結してくる。
- ・出撃中にテンジンに銃器や火薬の供給元を聞くエフェミア。自警団の武装はファミンや国軍から供給されているという。反乱軍に武器弾薬を売る者もいるようだが、主に武器弾薬の輸送部隊を襲って補給に当てているようだ。
- ・後手に回った自警団だが、馬車を守ることを重点にするつもりテンジン。
- ・しかし、蓋を開けてみると横転した馬車を遮蔽物として陣取っている反乱軍。100mほどの距離で自警団と撃ちあっている。反乱軍の顔ぶれをみると子どもと老人と女。陽動を疑うルノアとエフェミア。
- ・反乱軍は40人ほどで鬼気迫る表情。バリケードにした馬車を中心に左右10mほどに広がっている。対する自警団は30人ほど。反乱軍の銃撃はレベル1~2、器用B1~2、銃の補正で+2、ダイスの出目が7で命中達成値が10~14ほど。モヒカン連中とあまり変わらない練度。雑魚属性。
- ・今展開している兵を囷にして側面や背後からモヒカンが襲ってきそうは気配でもない。戦場の地形は草原。
- ・できるだけ反乱軍を殺したくないので攻め手に考え込む一行。そして、血の気の多い小隊長が怪しげな大量破壊兵器を取り出して、クロウに峰打ちされる。変わった小隊長も峰打ちされて指揮権が強引にテンジンに移る。
- ・一方、街に残ったメイリンとフィミアはすりこぎ棒で戦闘訓練。とてもものどか。

反撃

・テンジンに作戦を任せてもらおうと、エフェミアは反乱軍の左翼に迂回して星霊術で姿を消し、クロウとフラウで正面から制圧に行くという作戦を開始する。
・しかし、エフェミアが先行して1分後、テオはファミンの方角から接近する空気を切り裂く音を聞きつける。到着まではあと1分ほどだろう。
・何者かが近づいてくるという状況の変化に対応してクロウとフラウが前進制圧するタイミングを前倒して戦闘が開始された。

1ターン目

・フラウが騎士宣言。クロウが活性・死番の悟りを宣言。フラウが武装を形成しながら18mを前進、クロウが24mを前進。エフェミアは左翼への迂回中。
・反乱軍と自警団の銃撃戦で反乱軍に8人の被害が出る。反乱軍が手榴弾のような爆弾を投げつけてくるが射程外。

2ターン目

・フラウが全力宣言からの疾走で54mを前進。クロウは24mを前進。エフェミアは所定の位置に移動を完了。テオが接近する音に耳を澄ませていると、音が変わり何かを燃やすような音。加速したようだ。到着するまでの時間が短縮されたようだ。遠い空に猛スピードで飛来する大きな何かが見える。テオは自警団に何か飛来していると報告する。
・反乱軍と自警団との銃撃戦で反乱軍に6人の被害が出る。反乱軍からフラウに爆弾が投擲されるがフラウは尻尾を覆う鎧で弾き飛ばす。爆風を切り抜けながらも前進をやめないフラウ。対モンスター用の弾丸を使おうとしてテンジンに却下される自警団員。飛来する何かはハンかもしれないとテンジンは言う。

3ターン目

・フラウが騎士宣言から3mだけ前進。反乱軍の攻撃を一身に集める。クロウが全力宣言からの疾走で52mを前進。反乱軍に接触する。エフェミアはインビジブルエアに大失敗。3m前進しただけで終わる。クロウが接触したのを確認したテオが自警団に射撃をやめるように合図。
・テンジンの命令で自警団は射撃を中止、いったん戦闘から離脱する。反乱軍の銃撃がフラウに集中するが剣先を地面に突き立てたまま仁王立ちしたフラウが尻尾を含めた鎧で弾き、まったく命中しない。フラウは反乱軍の射撃から気迫と必死さを感じるが殺意は感じないことに気付く。

4ターン目

・フラウは騎士宣言で反乱軍の攻撃を集めようとする。接触したクロウは軍神と鎧袖一触を宣言。手加減攻撃で一気に30人を気絶させる。ここで反乱軍が武器を捨てて戦闘終了。テオが前線のフラウとクロウに飛行物体のことを伝える。

英雄登場

・反乱軍を全員逮捕しようと突入した自警団。雑な扱いで荒縄や鉄線で拘束した反乱軍をポイポイ鉄器に積み込んでいく。雑な扱いに文句を言うと、反乱軍は銃の不正所持や馬車の襲撃などを犯した犯罪者で、これでも優しくしている方だと自警団に言われる。怪我人があるようなのでクロウとエフェミアが手当てをするが、「くそっ、お前らさえ来なければ……」とヘイトを集めてしまった冒険者。
・飛来物がここで着陸。3mほどのサイズで太い両脚に太い両腕、三対の鋼の翼が生えたゴーレムのような外見。胴体にあたる部分に人間の胴体がベルトで固定されている。噂で聞いた通りの容貌の英雄ハンだった。手当てをしていたクロウとエフェミアは突き飛ばされ、反乱軍がこの場を収めてくれとハン様に縋る。自警団もハン様 came なら仕方ないとこの場をハンに預けてしまう。
・ハンは自分なら一人もけが人を出さなかったと冒険者を一口責めてから、自分が遅れたせいで手間をかけたと謝罪をする。手当てが途中になったが反乱軍は手当てを快く受けまいだろうからと、ハンが反乱軍と自警団を街に連れ帰って捕虜の処遇を自警団長や市長に掛け合うと言う。

戦後処理

- ・ハンが自警団に指示を出して護送隊を編成。街への撤収準備をしている。反乱軍は鉄器に積まれハンも着てきたゴーレムに収まり街への移動中の護衛になるという。
- ・ハンはお蔭で以前は全員処刑すべきという声が多かった自警団の中にも捕縛した反乱軍の人権を考慮するような議論になったという。
- ・ハンがファミンの人間だが、何故反乱軍に受け入れられるのか納得がいかないルノア。テンジンは反乱軍に実益をもたらしたからではないかというが………？
- ・自警団が反乱軍の殲滅に踏み切らないのは、反乱軍が自棄を起こして一斉蜂起すれば互いに大きな損害が出るからだと言った。さりげなく下層に踏み込んだことがテンジンにばれたルノアは反乱軍を刺激しないようにと言いつ渡される。
- ・エフェミアはハンが自警団側のはずのファミンの人間なのにどうして自警団に肩入れしないのかと不審に思う。中立の立場でないと和平をもたらすことができないのは確かだが………？
- ・改めて戦場を見回したエフェミアは、反乱軍に襲われた馬車を何も調べていないことを思い出す。慌てて馬車を調べると大量の銃火器が積み込まれていた。特別な武器は積まれていない。ファミンから自警団に供給するために送られたものらしい。馬車の中からは血の臭いがする。
- ・馬車の奥には帝国軍人の遺体が三つ、どれも首筋を鋭利な刃物で切り裂かれている。それなりに実力があるはずの軍人たちが抵抗した形跡がない。余計な外傷もない。抵抗の暇も与えずに三人とも殺すからにはかなりの手練れの犯行だろう。また、遺体を捨てずにわざわざ馬車に残していることが揉め事の種になるだろう。先程闘っていた反乱軍の仕業ではないのは確か。毒は使われておらず、ヴェムナイフによる傷口ではなかった。死後一日程度経過しているようだった。
- ・軍人の装備は軍用ナイフ、携行銃、中華式サーベルの一般装備。送り状も見つかる。
- 【アムト自警団隊長殿 日々の紛争を収めるべく尽力される貴殿の雄姿を評してうんぬんかんぬん というわけで、支給品を送ります。役立ててください。取り扱いなど不明な点は、護衛の兵士にお尋ねください。あらあらかしこ。ファミン地方警備隊】
- ・ファミンから自警団に武器弾薬を輸送する際は、基本的に軍人が御者を務めるが、ファミンの方が人手不足の場合は警備が甘くなることもあり、そこを反乱軍に狙われている。御者が足りない場合は軍の関係者が軍で依頼した冒険者が務める。
- ・ハンには軍人としての訓練などでついた傷はあるものの、特徴的な傷痕はない。ちよび髭の色は黒。
- ・御者台には白とも銀とも言えそうな髪の毛が落ちていた。北帝国では髪の色は黒がほとんどで白は珍しい。御者台に血痕はなかった。
- ・アムトは北帝国シンの中でも特殊な地域で外の出身かどうか比較的分かりやすい。まず名前の響きが違う。仏門への理解の深さも違い、アムトの仏門はより原典に近い。
- ・アムトとファミンとでは帝国語の発音も違う。ヤンの発音はファミン流でかなり訛りがあった。(実際はアムト訛りが無かった)ハンが発音は流暢(アムト訛りを再現している)。つい最近ファミンから来たばかりなのに？ ハンはより努力をしたのだろうと不審に思っていないテンジン。
- ・馬車が襲われたのが発見された状況を見張りで発見した小隊員に聞いてみた。草原を哨戒していると横転した馬車があり既に反乱軍が漁っていた。それを咎めようとして戦闘になったという。
- ・馬車の便は不定期で、襲われた馬車の到着予定が遅れていたかどうかは分からないという。
- ・アムトに到着した時点でテンジンから自警団に協力するメンバーは身分証となるプレスレットを受け取った。(ルノアとテオ以外)プレスレットを持っていても、自警団の詰所に自由には入れない。ある程度の協力は得られるだろう。自警団は基本的に冒険者を信用していない。今回冒険者を雇ったのは自警団長も洪々で上からの指示だったらしい。

アムト探索その3

・ごくごく平和にメイリンの訓練をしていたフィミア。無事に出撃組と合流をする。

・メイリンは昼食を作って食事をした後すぐに寺院に行き、マニ車にお祈りをするという。フィミアはそれを追いかけるもよう。(同行者を募る予定)

・エフェミアはグレートワズの寺院が街外れに灯台のように建っていたのを思い出す。

・エフェミアは寺院の方に行き、寺院の近くで呪文を詠唱しても大丈夫そうなどころはないかと探し始める。寺院を逸れて山道に入ったところに東屋があるのを発見。寺院からの距離は数キロ。東屋の周囲は木々が多く緩急のある山。インビジブルエアを使うには遠すぎると諦めるエフェミアだが、ふと気になって東屋を調べると、白髪を一本発見した。もしかしたら街の上層部とウォンが密会する場所ではないかと疑うエフェミア。瞑想明けの市長か副市長がウォンを密会するかもしれないと思ったエフェミアは次の日は森に潜んで東屋を監視しようと心に決める。

・次に火葬場へ移動するエフェミア。火葬場にはプリーストが二人合掌をしている。気になるものは多いが事件には関係なさそう。プリーストと会話をしているエフェミア。火葬場は夜の間は閉鎖となるが、炎は落とされることなく燃え続けているという。プリーストが交替で炎の番をしているらしい。プリーストに不審なところはなかった。

『俗世の人は、死者に縛られて生きているものもいます。悲しみを抱え続けるもの、故人を思い続けるもの。復讐や怨恨を宿したもの…そのような亡霊に捕われず、己の人生を歩んでほしいものです が…』

『我々には、人の一生を決める権利は、ありませんからね。本人がよければ、それでいい…とは言えません。罪人の命を不当に奪うこともまた、罪。己が悲しみに暮れることで、その人の支えになれる人を悲しませることもまた、罪となりうる。……あとはそのことに、気づけるか。気づいた上で…どう生きるかですから』

・クロウとフィミアは寺院にお祈りに行ったメイリンに同伴する。メイリンは寺院でマニ車を回して合掌。お祈りをしている。寺院には、(市長と副市長が)瞑想をしているであろう部屋に警護の自警団数名、寺院3階のテラスではハンとドマが反乱軍の処遇について会話をしている。ドマはあまりハンに好意的ではないらしく少しエスカレート気味。警備のお蔭で近づけそうにない。ハンとドマはそのまま喧嘩別れっぽく会話が終わった。

・ルノアは街外れのグレートワズの神殿に向かった、テオはそれを追いかけていく。グレートワズの神殿はひっそりと建っていて小ぢんまりとしている。神官も寝転がって酒を飲んでいる。すっかりやさぐれている神官。

・テオが追いついたときにはルノアは神官に押し倒されていた。ポカーンとするテオ。ルノアは触っても良いから話を聞かせてくれと女の武器を投入。

・まず、ハンについて聞くルノア。神官はハンがハゲのおっさんなのであまり興味はないがたまに裏山で見かけるといふ。街から出た登山道を上っていくところを見たようだ。

・ついでルノアはウォンについて聞くが、反乱軍についてはそこそこ詳しいと自認する神官がウォンの名前を知らない。昔は反乱軍が神殿に来て懺悔をしていたという。しかし最近はそのようなこともないという。もう5年以上前の話だとか。この5年間で何があったのかは神官も知らないようだ。5年前と言えばヤンが殺された頃だが……？

テンジン屋敷の夜その2

・エフェミアは横転した馬車で見つけた白髪と、登山道の途中の東屋で見つけた白髪を見比べる。同一人物のものかは分からないが、長さは同じくらいだった。

・フィミアが身分証のプレスレットを受け取る。

・テンジンから翌日の午前9時に自警団組は自警団へと召集となる旨を伝えられる。組み分けなど色々やることがあるようで、早くも屋過ぎまで、大体夕方までは拘束される予定。

・エフェミアは召集のお蔭で予定していた張り込みができなくなるのを悟った。エフェミアから白い髪の毛のことを聞いたルノアはハンとウォンが同一人物ではないかと当たりをつけ、登山道の方に張り込むことにして、いきなりテンジン屋敷を飛び出した。

・残ったクロウとエフェミアでテンジンに質問タイム。

・テンジンの父はまだ生きているが毫碌している。

・ウォンはファミン風の名前で、テンジンと会話した時も発音がアムト風ではなかった。ヤンは反乱軍を内偵していたわけでもなかった。

・自警団には過激派(反乱軍に敵しい)の方が多い。

・テンジン個人の考えでは、平和になって欲しい。貧富の問題はあるにしても差別は正当化していいことではない。しかし、テンジンは下っ端だった。反乱軍との衝突は損害が大きいので避けたい。

ペリルミッション

・裏山に直行して張り込みを開始するルノアだったが、早速狼に取り囲まれる。
・狼から逃げ出すルノアだが、**グレートワズ**の**神殿に明かりが灯っているのを見かける**。早速移動したルノアは、神殿の中で男性二人が喋っているのを耳にする。片方は昼間に話をした神官。聞き耳を立てたルノア。
神官「まさかとは思ったが、**ウォンってお前のことか**。あの時のクソガキが、**今じゃ反乱軍のリーダーとはね**」
男「るせえよ。それより、誰から聞いたんだそんなこと」
神官「昼間に来た、おっばいのでけー神官のねーちゃんだな。探し回ってるようだぞ」
男「チッ…**自警団が雇った冒険者か。確か下にもチョッカイ出してやがったな**」
神官「何企んでるのかわらねえけど、俺を巻き込むなよ。それと、**お前の兄貴はどうしたよ？** 挨拶に来るなら揃って来いよな」
男「ああ……あいつはな」（声が小さくなったあと、間をおいて）**殺したよ**」
・**ルノアは男の声には聞き覚えがなかった**。
神官「…（酒をぐいっと飲んでから）懺悔代わりか？御利益ねーぞ」
男「ほっとけ。**このパレードが終われば、俺もお役御免だ**。最後のあいさつに來ただけだよ。糞おやじ」
神官「……そうかよ、もう来るんじゃねーぞ。糞坊主」
神殿を出た男をルノアは追跡していく。男は街ではなく山の方へと向かっていく。しかし、レンジャーとしての経験の浅いルノアの追跡は気づかれていた。**ルノアと対面した男は白髪で頬に傷があった**。あんたがウォンなの？というルノアの問いに答える男。
男「さあな。教えてやる義理はないぜ。それとも、**俺はヤンだ、とかハンだ、といえは満足するか？**」
大人しく降伏をしなさいと銃を構えるルノアだが、**男の投げナイフに両肩を刺される**。**ルノアの反撃も男に当たったようだが、致命傷ではなかった**。**ルノアが撃ったのがリボルバーだと理解した男**。この街の外の住民である証拠。男はルノアのリボルバーの片方を分解してもう片方でルノアの両膝を撃ち抜いた。さっさと殺れというルノアに、**生きている方が都合がいいからと止めは刺さない男**。ルノアの仲間の冒険者が**普段通りではいられないだろうという計算があるようなことを言い残し、山の奥へと消えて行った**。
・残されたルノアは血の臭いに惹かれてきた狼から身を隠すためにくり抜かれた木の根元に身を隠す。出血が止まらないルノアは死の危険に瀕する。

銃声

・遠くから響いてくる銃声を聞いたテオとエフェミア。街中で銃が撃たれることはないはずと、ルノアが行った裏山の方へとルノア捜索に出発する。
・テオの超嗅覚を頼りにルノアを探す二人は血の臭いの先に群れている狼たちを発見。狼たちを追い散らして穴に隠れている**瀕死のルノアを発見する**。
・慌てて止血をしようとするエフェミアだが、ナイフの形状から、このナイフを抜くとさらに出血がひどくなりルノアがショック死すると判断。止血しようとする。しかし血は止まらない。どうやら**血が固まらなくなる毒が使われているらしい**。毒の種類が特定できない以上、本格的な設備のないこの場での治療には限界があると判断して、**ルノアを背負ったテオとエフェミアは自警団に駆け込む**。
・夜の自警団は、専門の医師もおらず、仕方なくエフェミアが自警団の治療設備を借りてルノアを治療。何とか止血は成功するが、**解毒ができておらず、ルノアは生死の境を彷徨っている**。**解毒するためには、元になった毒か、毒のレシピを知る必要がある**。それを知るためには毒を使った相手を調べるのが一番だろうとエフェミアは思う。
・**ルノアの肩に刺さっていたナイフはヴェノムナイフだった**。**メイリンが持っていたヴェノムナイフは黒だった**が**ルノアの肩に刺さっていたのは銀色だった**。
・テオは屋敷にいるメンバーにルノア負傷の報を伝え、クロウが自警団の方に移動。この時点で午前3時。
・クロウはすぐに犯人の痕跡を探しに行くように言うが、エフェミアはそろそろ活動時間の限界に差し掛かっているので睡眠をとらせてほしいと言い、3時間の睡眠をとる。

生と死の境で

- ・目覚めたエフェミアはルノアの容体が危険域に達している、既に犯人を捕らえたとしても間に合わないことを悟る。
- ・しかし、凶器になったヴェノムナイフと同じものを持っていたヤンのことを調べれば、彼が同じ毒を使っていたかもしれないと思いつき、テンジンの屋敷に急行する。ここで午前6時。
- ・テンジンは既に出勤。メイリンと出くわしたエフェミアはメイリンにルノアが瀕死であり、自警団の病室にいることを伝える。自警団に飛んでいくメイリンだが、あっさりとクロウに捕獲される。エフェミアは起きだしてきたフィミアとテオに事情を説明する。
- ・ヤンの部屋を探そうとして焦って取り乱すエフェミアを取り押さえるフィミアはエフェミアをぶら下げたままヤンの部屋に入ると、ヴェノムナイフが見つかった部屋にしては普通すぎることに気が付く。
- ・ぶら下がっていたエフェミアはヤンの部屋を家探して、隠し部屋の仕掛けに気がつき、これを開けて中の小部屋を調べる。小部屋の中の机から色々なものが出てくる。**【多数のヴェノムナイフ、試験管に入った液体、小さな絵、紙に書かれた反乱軍の動向や作戦概要、ナイフに使う毒など】**
- ・毒物をチェックしようとするエフェミアだが、何故か頭の中がシソでいっぱいになって貴重な時間を空費してしまう。エフェミアは自分だけではどうにもならないと判断して、フィミアとテオと一緒にヤンの小部屋から出てきたもの一切を持って自警団に移動する。
- ・クロウはメイリンから形見のヴェノムナイフを借りて、ルノアを刺したヴェノムナイフと比較する。クロウは形見の方のヴェノムナイフから微かな毒の異臭を感じる。
- ・集結して情報を共有する一行。近くの兵士に、仲間が生死の境をさまよっているから招集に遅れると自警団長に伝えてほしいというエフェミアだが、こういう場合のために全員を自警団に登録しなかったはずと言いつ返される。自警団の召集まで一時間。
- ・クロウはエフェミアが持ち込んだ資料から毒の正体を看破する。毒の正体が分かったがルノアの容体は悪化の一途をたどる。医学的な対処をするなら時間はかかるが確実に対応できる。魔法での治療の目標値は22と高い。エフェミアの星霊術で毒の進行を食い止め、テオの神聖祈祷でHPを回復した。
- ・ルノアの容体が安定したところでクロウ・フィミア・フラウ・エフェミアで自警団の召集に向かう。

自警団組召集

- ・自警団の召集にギリギリで間に合った一行。
- ・壇上には自警団団長のドマとナマズ髭の男、副市長チャンパがいた。チャンパの服装は火葬場の坊主の服を余所行きにしたような感じ。チャンパは少し痩せていた。(以前小太りだったチャンパを見ていたのはフィミアのみ。その時一緒にいたテオは痩せたチャンパを見ていない。この情報は共有されていない) **冒険者の数は一行を合わせても20人程度。**
- ・当日の警備について説明を始めるドマ。警備についての詳細な説明が始まる。内容は一度聞けば簡単にわかる程度のもの。厳密で綿密な警備というよりは、**冒険者を案山子のように扱っている**。不満げに自分たちは反乱軍に対する威嚇なのかと訊く冒険者に対して、多数の監視の目があり有事には動けると言うことが重要と否定はしないドマ。**ドマ自身はいらいらしながらも無理やり自分を納得させている様子。**
- ・ドマはこの計画は無駄なんだと思っているようだが、一方のチャンパは一仕事やり遂げたという心穏やかな目をしている。どうやらチャンパの意向で冒険者を雇ったようだ。
- ・お祈りが終わったばかりでふらついているチャンパ。誰かの変装ではないようだ。重度の栄養失調と疲労の状態。チャンパの臭いを覚える試みは人が多すぎたせいで失敗。
- ・自警団員の声を拾うと、昨日の今日で全体説明となり準備不足だったようだ。チャンパと市長が祈りの間で何かお告げを貰ったのではないかと噂し合っていた。ドマが渋々命令を受けていたことも知られていた。
- ・**冒険者の中には手練れはいない。(Lv3~5程度)自警団はLv2~4程度。ナイトやウォーリアはいない。反乱軍はLv1~4程度。**
- ・冒険者は言われたとおりにやって、問題が起これたら自警団に任せて、お金をもらってさっさと帰ろうという雰囲気。自警団員もそんな非協力的な空気を読んであまり協力的ではない態度。
- ・フィミアとフラウとエフェミアは自警団員たちに話しかけ、自己紹介などをして親睦を深め、むすつとしていた雰囲気が幾分か和らいた。
- ・それぞれチームを組む相手を確認してから、ヤンの部屋から出てきた資料を確認しようとルノアの病室に行く一行だが、ルノアの病室は片付けが始まっていた。

見舞客

- ・自警団組が説明を受けている頃、ルノアはテオにたしなめられながらも情報を共有する。
- ・共有した情報を自警団組に伝えようとテオは病室を後にする。移動中、注目を浴びるテオ。
- ・そこからテオは自警団の召集場所(議事堂)に移動するが、まだ入れなかった。そこで周囲の様子を確認すると神殿近くの裏山への遊歩道を見つける。遊歩道にはひとつだけ山の方へ向かった足跡がある。しかし、自警団の召集が終わったタイミングを逃さないためにテオは議事堂近くへと戻った。
- ・テオが去った病室に、外套を着て市民のような姿をした少年が入ってきた。**ルノアがゴミ溜めで出会った少年だった。**
- ・サイレンサー付きのリボルバーをルノアに突きつける少年。
- ・**ウォンがリーダーになってからテロのようなことを毎日やらされている**という。この街が大嫌いだという少年。
- ・少年はウォンが嫌だから**今日の襲撃でメイリンが狙われる**ということをルノアに**教えに来た**ことを明かす。**ルノアの口からメイリンの名前をウォンが聞いたのが原因**ようだ。
- ・メイリンは自警団の病室に突入してクロウにポイ捨てされてそのまま。**今は街にいるか家に帰ったか**だろう。
- ・這ってでも行こうとするルノアに少年は軍用のモルヒネを投げ渡す。**モルヒネを使えば短時間だが身体にかかる負担を代償に痛みを無視して動くことができる。**ルノアは病室から飛び出した。(ライファミュレット未補給状態)

焦燥

- ・ルノアがいるはずの病室はナースたちが片付けている最中だった。
- ・ルノアがいなくなったのでつきり退院ということだと思っていたらしい。**ルノアが外に行ったという目撃証言**まで出る。
- ・部屋の中にはたたまれた簡易ベッドがあるだけ。**ルノアの装備品も残っていない。**
- ・負傷により動けないはずのルノアがどこに行ったのか手がかりを探すが空振りに終わる。フィミアの戦場感応にも引っかからない。推理でも決め手が見つからない。テオの臭いによる追跡も薬品の臭いが邪魔をしてうまく働かない。オーディンはフィミアに『**戦士には命を懸ける時がある**』と神託をおろす。いくつもの断片的な手がかりを総合してどうにか**ルノアがメイリンを助けに行ったと一行は当たりをつけた。**クロウにポイ捨てされたメイリンが行くとしたら**テンジンの家**だろう。
- ・**三度にわたるルノアの単独行動に怒りのあまり仮装が解けかけているフィミアは、テンジンの家まで全速飛行していく。**空飛ぶ戦乙女に騒然となるアムトの街は自警団までが出動。フラウ、テオ、エフェミア、クロウは混乱する街の中で**テンジンの家に行くのが遅れてしまう。**

メイリンを守るために

- ・身体を引きずるようにテンジンの家に急行するルノア。街を抜けて山道を走り、**テンジンの家に着く。**家の中は荒らされていて誰もいない。壁には弾痕、ドアもボロボロ、しかし血の臭いがしない。
- ・メイリンの名前を呼ぶルノアだが返事はない。しかし、**ちょうどその時山の方から銃声が聞こえた。**山に行く前に『**うらやま→ルノア**』とメッセージを残したルノアは裏山へと走り出す。
- ・痛覚を麻痺させているとはいえ、無理に無理を重ねながら藪をかき分けて山道を行くと、**ルノアは開けた場所でウォンとメイリンが対峙しているところに行きついた。**
- ・肩に怪我をしているメイリンはウォンに切りかかる。**ルノアとフィミアの訓練のおかげか攻撃は上手くなっている。**しかし、元々の技量差に加えて回避も防御も教わっていないためメイリンはたちまち劣勢になる。一方の**ウォンもルノアにもらった左胸の傷を気にして動きがよくない。**
- ・ルノアはウォンとメイリンの間に割って入り、メイリンに家に戻って仲間を呼んで来いと言うが、仇を目の前にしたメイリンはなかなかいいうことを聞かない。
- ・**ルノアの涙の説得でようやくメイリンが仲間を呼ぼうとその場を離れるように動き出す。**

再戦

・関係のない者は殺すつもりはなかったが、ルノアは殺す必要があったと思うことにすると言うウォン。戦闘が始まる。**メイリンを無事に逃がすためには30ターンをしのがなければならない。ルノアはHPは回復しているものの瀕死状態(命中・回避に2ペナ)での戦闘を強いられる。**しかし、ルノアほどではないがウォンも傷ついていて本領を発揮していない。

1ターン目

ヴェノムナイフを構えるウォン。見えざる鷲の舞を始めるルノア。ルノアは全力防御を宣言し、ウォンは切りかかってくる。最初の攻撃は回避に成功する。
ウォン『…一つ聞かせろ。なんでこんな街の連中に手を貸す。お前らさえ嗅ぎまわらなければ、今までのように行けたんだ』
ルノア『この街が、メイリンが、気に入ったから。それだけ。あんたこそ、この街の人間でもないのに、なんでこんなことしてんの？』
ウォン『他所者が気張る理由なんざ、お前らが一番良く知っているだろ！』
ルノア『さあ？ あたしバカだから、よくわかんない！』

2ターン目

見えざる鷲の舞を続け全力防御するルノアに対してウォンはフェイントを繰り返す。
ウォン『じゃあ説明しても無駄だな、はやくたばれ！』

3ターン目

ルノアはなおも見えざる鷲の舞を踊り続けて全力防御をする。**素早くナイフを繰り出してくるウォン。避けそこなったルノアの腹部から血が噴き出す。**
ウォン『はあ、はあ…まだ続けるか？』
ルノア『はあ…はあ…あんたが、メイリンを追わない…なら、見逃してあげる…っ』
ウォン『…だったら、今晚中に国へ帰るんだな。**お前らが関わったところで…もう何も変わりやしねえ**』
ルノア『どういう…ことよ？』
ウォン『俺も、反乱軍どもも、この都市も、何も変わらねえ…俺が死んだら反乱軍が消えるか？ 俺が自警団長を殺したら、下の奴らが人権を得れるか？ なんも変わらねえんだよ』
ルノア『変わらないと決めつけたら、ほんとに変わんない。あんた、現状を変えたくてこんなことしてるんだと思ってたけど、違うの？』
ウォン『はっ、そんなわけねえだろ…俺がそんな聖人に見えるか。…まあ、心配しなくても、**パレードが終われば俺もこの町から消えてやるよ。**だからさっさと帰れ。お前らがいると邪魔だ』
ルノア『…あんた、何が目的？』
ウォン『**金と………自由**』
ルノア『…自由？』
ウォン『さっさと**こんな田舎町から出たい**ってことだ これ以上付きまとうな』
ルノア『………』
ウォン『…一つだけ、教えてやる…**この町に、お前らの本当の味方がどれだけいるか、考え直してみな**』

そのまま山中に消えるウォン。ルノアは一人傷を癒す。

留守宅

・いち早く屋敷に着いたフィミアはひとまず荒れたテンジンの屋敷の様子を見まわす。荒らされてはいるが、**隠し小部屋は見つからなかったようで、ヤンの部屋はそれほど被害がなかった。**
・山の方から駆け戻ってくるメイリンの姿。フィミアが見ているとメイリンはフラフラと道端に倒れ込んだ。
・フィミアが助け起こすと**大量に出血していて脇腹に深くナイフが刺さっている。**大丈夫だからルノアを助けに行っていくメイリン。フィミアは神聖祈祷で傷を治療しようとするが、治療してもすぐに傷が開いて出血してしまう。どうやら**毒のようだ。**
・メイリンをどうすればいいか、採れる策が無く途方に暮れたフィミアは仲間を待つことにする。

街で

- ・混乱が収まってようやく動けるようになった街で、クロウはテンジンの家に急行することにした。
- ・一方エフェミアは反乱軍らしい眩きを聞きとめ、そのつぶやきを発した警戒心の強そうな少年に悪質タックルを決める。
- ・捕まえた少年に『あいつの仲間』という眩きの意味を尋ねるエフェミア。少年はルノアにウォンがメイリンを狙っていると教えた少年だった。
- ・少年にルノアの行方を問い詰めるエフェミア。少年は**メイリンが反乱軍に狙われている**と話す。少年はエフェミアにウォンに睨まれないうちに早く帰れと忠告。
- ・少年はハンを見たことはあるが、まだ話したことはないと言う。何故よそ者のはずのウォンが反乱軍を仕切れるのかを聞くがそれは教えてもらえなかった。ウォンも街も冒険者も信じられないという少年。
- ・少年は**ウォンは最近リーダーになった男だ**と言って去っていく。エフェミアはテンジンの屋敷へと走り出す。

傷だらけのルノア

- ・戦闘を追えてルノアは無理をしながらテンジンの家へと戻ろうとするがかなりの無理を重ねて足取りが重い。
- ・ようやく屋敷が見えたところでルノアと遭遇するクロウ。**ルノアはもう動いているのが不思議なくらい**の状態。
- ・クロウは自分を責めているルノアを屋敷に運びながら、それまでルノアが見たもの聞いたものを情報共有。
- ・そのまま二人はテンジンの屋敷に到着する。
- ・フィミアはメイリンを毛布でくるんで病院への搬送に備えている。
- ・ルノアも別のベッドに寝かされそうになるがメイリンのベッドのそばに駆け寄る。
- ・クロウが**メイリンを診断すると出血多量に内臓損傷、肩や腕にも切り傷。しかし一番は脇腹の大きな傷だった。ルノアが受けたのと同じ毒でメイリンも苦しんでいた。**
- ・そこにエフェミアも到着する。

英雄と山で

- ・クロウとエフェミアに取り残された形になったテオとフラウ。
- ・単独行動に躊躇いながらも山が気になるフラウに、テオが山に行ってみようと提案する。
- ・歩いていくと、テオがエフェミアと通った山道に繋がっている。
- ・しばらく進むと**東屋で煙草を吸っているハン**と遭遇する。
- ・テオとフラウは山の上から街を見下ろす。
- ・ハンが街ではゆっくりできないから羽を伸ばすにはいいところだと語る。
- ・テオが見た感じ、東屋はさほど古くはなかった。
- ・しばらくまったりしていたハンが寺院へと戻っていく。
- ・近くに誰もいないのを確認してからテオの影に、影入りをするフラウ。これではぐれることはない。
- ・テンジンの屋敷へと向かうテオ。屋敷が近づくとだんだん血の臭いが強くなっていく。

集結

- ・テンジンの屋敷へと到着したエフェミアは早速メイリンを解毒しようと星霊術を使う。しかし、それは大失敗に終わって、一気に魔力を使い果たしたエフェミアは気絶した。
- ・フィミアとルノアはエフェミアにパスマンタルで魔力を送り込むが、エフェミアを目覚めさせる方法がない。
- ・力を使い果たしたルノアもまた気絶して悪夢に苛まれる。
- ・フィミアは最後の切り札を使い、その身にゲルヒルデを降ろし、メイリンを癒す。
- ・フィミアはメイリンのナイフを無造作に引き抜くと、やばい音をさせながら強引にメイリンを治療した。
- ・メイリンも欠損状態扱いとなったため一週間の安静が必要となる。
- ・フィミアはルノアも治療するが、ルノアはTPが0になっているのですぐに再び気絶する。この治療でモルヒネの効果が切れて、激痛に満ちた悪夢に苛まれるルノア。
- ・さらにフィミアはエフェミアも治療する。目が覚めて混乱するエフェミアだがクロウのチョップを脳天に受けた後、フィミアと一緒に情報共有をされる。状況を把握するフィミアとエフェミア。
- ・昨夜以来ほとんど寝ていなかったクロウが睡眠に入る。
- ・エフェミアはルノアとメイリンを病院に搬送するよりもテンジンの屋敷で寝かせておいた方が良いと判断した。
- ・優先事項が一段落したエフェミアが他人の目を気にせず済むと判断してヤンの部屋から出てきた資料を読み込む。
- ・ヤンの残した反乱軍の資料には、反乱軍の行動計画や、安全性の考慮。可能な限り双方の被害を抑えつつ利益を得るための試算、自警団との交渉に使えるような材料の模索などが書かれていた。全て5年以上前の情報だった。しかし、計画は努力の跡が見られるものの実行に至らず没になっていた。
- ・ヤンが反乱軍から自警団へと送り込まれたスパイだったのではないかと疑うエフェミアだったが、落ち着いて資料を考察することで、ヤンが反乱軍の幹部だった可能性に気付いていく。その全体像を把握するために足りないものはテンジンの証言だとエフェミアは判断した。
- ・資料の中に繰り返し現れる【ズオン】という名前。どうやらこのズオンという人物が反乱軍のリーダーだったらしい。ズオンは帝国語で表記すると「楊」。これをファミン風に発音するとヤンとなる。ヤンは反乱軍の元リーダーだったようだ」と資料を読み解いたエフェミアは判断した。ちなみに【ハン】にあたるアムト風の名前はなかった。
- ・そこにテオとフラウが戻ってくる。テオの影から出たフラウはエフェミアから事情を訊くと、今度は単独行動をさせまいとルノアの影に入った。ルノアには内緒にするようにと言外にテオとエフェミアに伝えるフラウ。
- ・ここでクロウとルノアが目覚める。しかしルノアは痛みのせいで満足な睡眠がとれず、TPが2しか回復しなかった。
- ・エフェミアはヤンの資料について分かったことをテオとフラウに情報共有をする。
- ・それから残った資料の小さな絵を見ると、グレートワズズの修道衣を着た男と、黒髪の少年と銀髪の少年が描かれていた。おそらくグレートワズズの神官とヤンとウォンの絵だと判断するエフェミア
- ・散らかった家の中の掃除も兼ねて反乱軍の遺留品を探すエフェミアは床に散らばった薬莢を発見する。フリントロックでは薬莢は使用しないはず。散らばった薬莢はマシンピストルの薬莢だった。帝国軍ではまだフリントロックが使われていたはず。そうでない銃は専門のガンナーにしか使えない。最低でもルノア以上の技量の者がいるはず。
- ・庭に出てみたエフェミアだが、重い物の足跡はなく、大勢で押しかけた風でもないと感じる。少数の手練れの犯行だろう。床の足跡を見るとレンジャー用のブーツだった。仲間の足跡ではない。成人男性の足跡だ。争った跡がみられる。争った相手の足跡は小さかった。おそらくこれはメイリンの足跡だと判断するエフェミア。
- ・ハンが履いていたのは草履のような靴だった。ということはハンはハンがの仕業だと考えにくい。
- ・この時点で時刻は18時。ウォンを追うにはこれから暗くなるうえに地の利も敵にあるのですぐに追うのは諦める。
- ・白髪も落ちていたので襲撃はウォンの仕業だと判断したエフェミア。ということは、ウォンは最新のマシンピストルの供与を受けていることになる。それらを供給できるとしたらハンしかいないと判断するエフェミア。
- ・ウォンほどの男がわざわざ争った跡を残すなら、そこに威嚇の意味合いを強く感じるエフェミア。冒険者の関与を嫌っているようだ。また、何かを探しているような様子もあった。探していたのはヤンの残した資料だろうか？
- ・痛みに苦しむルノアの痛みを軽減する方法はない。ルノアはモルヒネを欲しいと懇願。
- ・現場検証からこれ以上情報を得ることはできないと判断し、フィミアのマテリアライズでテンジンの屋敷を修理する。

帰宅

- ・夜になってテンジンが帰宅する。メイリンが襲われて大怪我をしたと説明。
- ・傷ついたメイリンを見て落ち込み、ヤンに詫げるテンジン。
- ・ヤンについての話を聞きたいというエフェミアに対し、誰に襲われたか分かるのかと訊くテンジン。エフェミアは遺留品の白髪と薬莢を差し出す。ウォンの仕業だと理解するテンジン。なぜ今になって襲われたかを言うところろしいので口に出せないエフェミア。
- ・部屋を捜索したエフェミアはヤンが反乱軍のリーダーだったということを知ったと告げる。諦めたように認めるテンジン。グレートワズスの神官は昔、孤児院のようなものを運営していたらしい。
- ・ヤンは反乱軍と都市が融和させることができないことに苦悩し誰にも相談できなかった。リーダーがウォンに変わってから武力闘争が増えた。テンジンはそれをヤンの死後になって知った。
- ・ウォンがパレードが終わったらこの街から消えると言っていたことをテンジンに伝えたが、テンジンもウォンの真意に心当たりはなかった。もう反乱軍として活動する意味がない？
- ・パレードを行うことで何か致命的なことが起こるのではないかと不安を口にすエフェミアだが、パレードを中止しては市民の落胆も大きく、平和への道が遠のくとテンジンは言う。つまり、パレードが行われるまでのあと二日間で何とか事態を解決しなければならない。
- ・ウォンがこの街には供給されていないはずのマシンピストルを使っていたことにも疑問を持っているエフェミア。誰がウォンに最新兵器を供給しているのか？ ウォンには裏のコネがあり、それこそがウォンがこの街にとどまる理由かもしれないというテンジン。エフェミアはハンに対する疑惑を深める。
- ・裏山の向こう側には谷があり、そこからゴミ溜めに繋がっているようだ。農地を通らずに上層に行けるが道は険しくウォンのような手練れでないと通行はできない。鉄器も使えない。谷自体には何も無いようだ。
- ・市長か副市長のどちらかがウォンと接触しているのではないかと訝るエフェミアに、その可能性はあるかもしれないと言うテンジン。召集も急なもので何か不測の事態が起こったのかもしれない。しかし、テンジンは立場上、都市を疑うことはできないし、都市と運命を共にすることしかできない。この先はよそ者である冒険者が勝手に正義を振りかざすしかない。
- ・普段、ハンは地方軍の基地にいて、副市長は寺院にいてという。
- ・今更自警団から解雇されることはできない、解雇されたとしてもパレードが終わるまで投獄されるだろう。
- ・寺院で音が外に漏れないところがないかと独り言を言うエフェミアに、明日、仕事をさぼるために瞑想の間に忍び込もうと独り言を言うテンジン。
- ・苦しうに呻き声を上げるルノアの見舞いにテンジンを連れ込む。ルノアの傷の深さに正直な感想を漏らすテンジン。エフェミアはルノアの毛布を交換することで席を外す。テンジンはメイリンを守ってくれたルノアに礼を言う。ウォンを見つけ出してこの手で報いをとと言うテンジン。
- ・メイリンとルノアの傷の深さを見てよく下山できたと感嘆するテンジンに自分は薬のお蔭で動けたがメイリンはよく頑張ったと言うルノア。フィミアもメイリンを治すことをテンジンに約束する。
- ・メイリンが頑張った？ と聞き返すテンジンにルノアが着いた時に、父の仇とウォンに切りかかっているのに命を落とさず怪我で済んでいる。ウォンが本気だったら自分と同じようなことになっているはずとルノアは言う。ここでルノアは何らかのヒントを得ることに失敗。
- ・てっきりメイリンが殺される寸前にルノアが助けたと思い込んでいたテンジン。メイリンには戦ってほしくはないがこれも血かもしれないと言う。ウォンがメイリンを殺さなかったのはルノアにやられた傷のせい、関係ない者は殺さないというウォンの主義なのか。しかし、テンジンはウォンが手加減などとてもないと言う。ここでもルノアはヒントを思いつかない。やはり傷が深いからだろうか？
- ・テンジンによると、瞑想が終わった後の市長と副市長ははかなり痩せてはいたが、ちゃんと二人とも出てきた。
- ・その夜、テオとエフェミアで見張りを行ったが、特に何も起こらなかった。

朝

- ・朝から雨が降っている。
- ・痛みの取れないルノアはイブを服用。コレジャナイ感。
- ・テンジンは非番のようでメイリンの看護。怪しげな薬を作ろうとしてクロウに止められた。
- ・テオとエフェミアは寺院の方へと出発。ルノアは寝たきり状態。フラウはルノアの影で待機。クロウとフィミアはメイリンの看護をすることにする。

山道から現場検証へ

- ・テオとエフェミアは山道経由で寺院へと向かった。途中東屋に立ち寄ると、葉巻煙草を吸った跡がある。昨日ハンが吸ったものの可能性が高い。
- ・雨の山道の道中でテオは何か忘れていたような焦燥感に駆られる。山道に戻って足跡を確認に行くテオとエフェミア。
- ・クロウとぼったり遭遇し、**ウォンとメイリンとルノアの戦場**に行って現場検証をすることになった。
- ・**雨で流れそうになっている血溜まりを発見した。**
- ・そういえば、**ルノアが駆け付けた時にはメイリンは肩を怪我していたが、フィミアが発見された時には脇腹に刺さったナイフが致命的な傷になっていた。**クロウはルノアと別れた後のメイリンがフィミアに発見される間に何かがあったのだと気づく。**脇腹に刺さっていたナイフはフィミアが引っっこ抜いてそのままになっている。**
- ・慌ててテンジンの屋敷に戻るクロウ。エフェミアもなぜかついていく。
- ・再び戦闘の跡に戻ってきたクロウだが、雨が降っているのと、現場を絞り込める情報を持った人がいないので捜査に難航する。
- ・クロウは捜索の手伝いを依頼するためフィミアを探しに街に移動する。

看病

- ・フィミアはメイリンにリジェネレートをかける。**顔色がよくなったメイリンは一週間をかけて快方に向かう…はず。次の日には目を覚ますかもしれない。**
- ・フィミアはブルースたちとの約束を思い出す。ルノアは何か溜まってきているのを思い出す。
- ・クロウも大人数で看病している場合ではないと気づき、まずはウォンとメイリンとルノアが戦闘した戦場に向かうことにする。
- ・フィミアはブルースたちに会うために寺院へと出かけた。
- ・ルノアたちの戦場から舞い戻ってきたクロウは、居間の隅に追いやられた**赤黒いナイフを見つける。ナイフの血を拭くと、色は黒だった。メイリンのナイフホルダーを確認するとナイフが入っていない。**
- ・**傷口を見ると自分で刺した傷ではなさそう。ナイフを躲そうと身を振った形跡がみられる。内臓を正確に狙っているあたり、メイリンにナイフを刺したのはよほどの手練れだと分かる。**詳しい傷の様子は既に神聖祈祷で治療されているのでよく分からなくなっている。
- ・犯人の特定をするべきだと思ったクロウは犯行現場に戻る。
- ・何故か戻ってきたエフェミアはルノアのシモの世話をしてから途中でテオを回収して再び寺院に向かう。

街でデート

- ・寺院で待ち合わせたフィミアとブルースとレットは街へと繰り出した。
- ・街に出ると、ハンが一般市民に囲まれてスター扱いになっていた。
- ・自分なら戦場で死人(そのときは怪我人だったけど)を出さずに制することができたというハンのが気に入らないフィミアはハン^の動向をしばらく探ることにする。
- ・ブルースは死人が出ないに越したことはないと言い、レットは興味がないし早く帰りたいという。
- ・握手会・サイン会の様相を呈してくるハン^の周囲。
- ・**ハンを選定してみたフィミア。【ガンナー、シーフ、ファイター、スチームパンカ】細かい数値までは分からないが、末端の軍人に収まる力量ではない。**
- ・そのまま街の散策に移るフィミア一行。
- ・現場検証に協力を貰うためにフィミアを追ってきたクロウが合流。
- ・フィミアはブルースたちと分かれてクロウの方についていく。

続・現場検証

- ・クロウと合流したフィミアは記憶に従ってメイリンの襲われた場所を探す。
- ・クロウはメイリンっぽい足跡を見つけ、血の臭いが若干強いところにとどり着いた。
- ・クロウは**茶色の粉末を包んだ紙のようなものを拾った。匂いのする燃えカスを包んだ感じ。**
- ・**クロウは謎の粉を手に入れて夜になった。**

寺院潜入

- ・寺院に忍び込んだエフェミアは瞑想の間に忍び込むと、インビジブルエアで姿を消して、寺院の上層を目指して進んでいく。
 - ・テオは何か異変があったら寺院に駆け込めるような位置で散歩をしている。
 - ・寺院上層の第一階層。左右に木の扉、奥に階段がある。
 - ・木の扉の向こう側からは音は聞こえるが、星霊術を維持しながらなので聞き耳の精度を保てない。赤外線視力で木の扉を見ると四つとも人がいそうな感じがする。ここで扉を開くと姿を消した意味がないので階段で上の階層に上がっていく。
 - ・上の階層では、正面にテラスに続く通路、左右に幅の広い回廊があった。テラスに行ったが無人だった。引き返して回廊を左方向に行く。
 - ・回廊を進むと**ドマとすれ違う。辟易している様子で『シネバイノニ…』と愚痴っている。無茶振りをされたようだ。**
 - ・さらに進むと東屋があり、**チャンパが優雅にお茶を飲みながらニラ饅頭を食べている。一緒にいた侍女が呆れるくらいお代わりをしている。侍女もチャンパに『シネバイノニ』と思っている。ファミンからの支給品を贅沢に使っているらしい。チャンパはあまり仏門の教えに忠実ではないようだ。テーブルの上には食べかすがぼろぼろ。書類などなかった。**
 - ・しばらくチャンパを観察していたが、来客が来る様子はないので、諦めて回廊を先に進む。
 - ・しばらく進むと大きな戸が開いた豪華な仏間があった。中には白髪の老人が座禅を組んでいた。時々数珠が鳴ったりする。老人の手元には石板がある。覗いてみたが難しい帝国語で単語くらいしか拾えない。教典のようだ。
 - ・周囲を見たが、ハンやチャンパたちと繋がるようなものはない。俗世のものは置かない部屋のようだ。老人がなんとなくエフェミアの気配に気づく。まず、紙にメッセージを書いて石板の横に置いたが**老人は目が見えないようだ。アンデッドかと思ひ念仏を唱え始める老人。**
 - ・エフェミアは意を決して透明化を解き、姿を現した。反乱軍の企みを追ううちにたどり着いたと言うエフェミアに対し少し驚いた老人だが、**エフェミアが訳有りだと察して書庫へと導く。**
- エフェミア『……………市長様は反乱軍をまとめている男をご存知でしょうか？』
- 市長『せっかちな御方だ。それとも、若さ故かの』ホホホ、と老人は間延びした笑みを浮かべながら、一息をついて『何故それを問う？**反乱軍、と今は呼ばれておるのだったか…あのものたちを、殺すよう誰かに頼まれたかの**』
- エフェミア『…ええ、まだ92歳です。ですが、ぼやぼやしては年月は矢のように過ぎ去ってしまいます。街では反乱軍と呼ばれています。私は…私たちは、終戦祭を警備するために招かれました。できることなら誰も死なずに済ませたいとは思っています…彼らと都市との間の溝は、数十年前から穿たれていると聞きます。では、彼らは元々何だったのでしょうか？』
- 市長『なんと、噂に聞く長命のものであったか。それは知らず失礼なことを』老人は深く、頭を下げました。『…**成程、チャンパが呼んだ冒険者の御一人か。まったく勝手なことを…**』
- エフェミア『い え、こちら市長様には相当の非礼を働いております。礼に関しては、双方いったん棚上げとさせていただきます』ペこりと頭を下げて『はい。副市長様はたいそう乗り気のようにでしたが、自警団長様はそうではないご様子でした。私たち冒険者は何が狙いで招かれたのか、副市長様の本当の意図を測りきれておりません』
- 市長『**彼らは、元は革命軍と呼ばれておった。恥ずかしい話、この街の貧富の格差があります。その差を縮めるために奮闘したのが、その革命軍……**ですが、**何時のころからか争いによる武力解決を主とするようになった。おそらくそのころから、反乱軍と呼ばれるようになったのでしょう。チャンパの意図は、ワシにもわかりかねます。市長とは名ばかり、このような体ですから、実政権はチャンパが持っております**』
- エフェミア『革命軍…ですか。それは、もしや五年前のことではありませんか？ 彼らの先代の指導者は、都市との間に融和をもたらすことができないかひどく心を砕いて…志半ばで亡くなってしまったそうです』
- 市長『そうですか、**もう5年になりますか…**』しみじみとしている市長
- エフェミア『…差支えなければ教えていただきたいのですが、二日間の瞑想でミホトケよりお告げをいただくのは市長様で、それを実行に移すのが副市長様…という理解でよろしいのでしょうか？』
- 市長『少々、語弊がございます。瞑想は悟りへの道を開くための修行に過ぎません。占術を目的としたものでは**ございませんし、かつて神との対話に成功したものは、おりません**。2日間で終わったのは、早い話チャンパが根を上げただけでございます。ワシのころは1週間以上も珍しくはございませぬ。仏門へ至る道とは、そういうものでございます。ですが、**お告げがあったと言え、民を納得させやすい、**というのもまた事実。**もしそれを声を大にして言われているのであれば、何かしら意図が働いておるやもしれませぬ**』
- エフェミア『…失礼いたしました。私たち森の民は、あまり信仰とは縁がありません…一部に龍を崇拝する者たちがいる

程度で…。一週間も続けられるとは、私たちにもできそうにありません。(小さく溜息をもらす)…では、瞑想で何か新しい知見を得ることはないのでしょうか？』

市長『悟りへの道を僅かでも、開けるやもしれません。考え方が変わることも、修行に打ち克つ強さを得ることもあるでしょう』

エフェミア『…長命な私にとっても、気の長い話です…。失礼を承知で申し上げるならですが、瞑想を行うのは都市の政策に、市民に対する説得力を付与するための儀式…ということでしょうか？』

市長『褒められたやり口ではありませんがな』老人は、少しばかり悲しそうな声色を滲ませます。『己が身を第一に考え、祭事を盾に市民を誑かすなど、あつてはならぬことですが…これもまた、天命…』

エフェミア『今の革命軍の指導者は、五年前に先代の指導者を殺害した好戦的な男だそうです。…その男が、**終戦祭のパレードが終わったらこの街から消える**と言っていたそうです。私は、それが、この街にとって取り返しつかない災厄を呼ぶものではないかと恐れています』

市長『**そう遠くない未来、この街は滅ぶでしょう…すべては身から出た錆**。この老いた体が朽ちるまで、見守ろうと思えます。…**仮にそれがチャンパの描いた絵だとしたら、それはないでしょう。街が今すぐ滅んで困るのは、彼も同じ**。いつか町は滅びますが、**滅んで得をするものなどありません。革命軍も然り。怒りのままに争って勝ち進んだとして、その先に何も無いことは彼らも知っている**』

エフェミア『…信仰に疎い私からすると、市民が都市の政策は間違っていないと信じていることができるなら、それもまた統治の手法の一つではないかと思えます。もちろん、間違えのないように政策を練っておくのが前提ですが』

市長『この老いぼれの知恵でよろしければ、一つお耳を拝借したい』こほん、と老人は咳をつき『**もし何者かが糸を引いているとするならば、悪事は必ず益に結ぶ。何か起こるとして、起きたとして、それで利益を得るのは誰か…それを見極めなされ**』

エフェミア『革命軍の人たちも戦いたいとは思っていないようです。今は好戦的な指導者に率いられて嫌々戦っています。でも、その指導者がいなくなったら次は自分たちが全員殺されると思い込んでいます。革命軍……いえ、反乱軍をまとめるウォンという男は、おそらく革命の成否などどうでもいいのでしょう。彼は金と自由のために戦っていると聞きます』

市長『**チャンパが貴女(冒険者)達を、無理を通してでも招き入れたのであれば、それも益を見越しての事。いかなる理由があっても、終戦祭を成功させねばならない理由が、ある**のでしょうか。戦乱が激化してからは、捕らえた罪人達の扱ひも悪くなっていると聞きます。おそらくそのことを指しているのでしょう。ウォン、という男については、私も知らぬこと…お力になれず申し訳ない』

エフェミア『…ありがとうございます。何が利となり益となるか…具体的に彼らが何を企んでいるのかが分かりません。おそらく**破壊と殺戮を撒き散らすのだと思えますが、その矛先が分かりません**』

市長『ほほ、それは手段であつて**目的ではない**でしょう。勿論、中にはそれが見たいという醜悪な邪悪もおりますが…**大抵の人間の悪事は、破壊と殺戮で、利益を得るから望むのです**。1つの考えに縛られてはなりませんぞ』

アムトの街にウォンたちが狙う金の元になるものは何か考えたエフェミアだったがシソのことで頭がいっぱいになってしまい、市長に喝を入れられる。

エフェミア『もう一つ、気になることが有ります。いま、この街で英雄とされている、ハン様です。彼は平和をもたらすために動いているらしいのですが、どうしても私は彼に対する疑いを拭い去ることができません。ハン様が現れて以来、革命軍の捕虜に対する扱ひがこれまでよりも軟化したと聞きます。ハン様は反乱軍にも人望があるようです。…ですが、どうにも彼の裏が読めません』

市長『ハン殿か。…すでにこのような事態になっている手前、**確証もなく言葉を発するわけにはいかずドマに任せておつたが、あのお方は、矮小な御方だと、だけ言っておこう**。むろん、目の見えぬワシが感じた雰囲気ではあります。がな。貴女のような、大きくおおらかな、姿かたちは見えなくても…感じております』

エフェミア『市長様ったら、もう…』照れるエフェミア。『矮小な…ですか。やはり、ウォンと副市長様とハン様で…』

市長『**ウォンという男も、ハン殿も、ファミンの方**なのでしょう。であれば、**この街で詳しく知るものはおりますまい…ファミンのものに聞く以外には…**』

エフェミア『この街を詳しく知る何方かを抱きこんでいるということ、ですよ』

市長『ほほ、**とは限りませんぞ**。1つ先を読んだら、次は2つ、別の道を読み、そして3つ、先の先を考えるのです。**事実ではなく、真実を見極めなさい**。さすれば、悟りへの道に一步、近づけることでしょう』

エフェミア『市長様は、ハン様が普段どこにおられるかご存知ですか？ どうも普通の所在がつかめないのです』

市長『目の見えぬワシには、**彼の行動は把握はできぬ。彼の世話はドマが請け負っておる**。これを持っていくといい。**ドマは面倒な性格じゃからな。協力を拒むようであれば、それをどちらでも良いから見せるといい**』

・エフェミアは市長との関係性を示す強い権限を持つ印籠と、『**しょうらいのゆめ ドマ**』という音読すると強い破壊力を持つ本を手に入れた。

・市長に対し市民や反乱軍の人たちが一番幸せになる方向で終戦祭を収めたいと言い、市長に感謝の意を述べてから、隠密行動で寺院の裏に出て、テンジンの屋敷へと戻った。

・要約

- ・反乱軍は元は革命軍と呼ばれ、貧富の格差を埋めるために奮闘していたが、五年前から武力闘争をするようになった。市長とヤンに面識があったかどうかは訊けなかった。
- ・市長には既に実権はなく、政務はチャンパがすべて行っている。チャンパは支給品で贅沢している。瞑想してもお告げがあるわけではない。ただの儀式。
- ・チャンパも反乱軍も街が滅びては困る。破壊も殺戮も何か実利を求めてのことでそこを見極めるのが肝心。
- ・ハンもウオンもアムトの人間ではなくファミンの方の人間。ファミンの人間でないと分からない。
- ・ハンについてはドマの方で世話をしている。
- ・ドマが言うことを聞かないときのためのアイテムを得た。

集結再び

- ・エフェミアのフォローをしようとして寺院に取り残されたテオ以外のメンバーが、テンジンの屋敷で情報を共有する。
- ・クロウがメイリンの戦闘現場で拾った怪しい粉末は、エフェミアが東屋で見たハンの葉巻の粉と同じものに見えた。
- ・クロウはドマの『しょうらいのゆめ』の封印(糊付け)を解いた。
- ・エフェミアはハンとウオン以外にアムトとファミンの情報を知っている人間は誰だろうかと考えた。メイリン以外にも自警団に雇われた冒険者たちがいる。
- ・メイリンを襲ったのが誰なのか意見が分かれる。どうしてメイリンは犯人に形見のヴェノムナイフを渡してしまったのか？ なぜマシンピストルが使われていたのか。
- ・実はメイリンを刺したナイフには古い毒が残留していただけで、メイリンを殺すために塗ったものではなかった。ヴェノムナイフは毒が揮発しにくい構造になっていて、アルコールで洗わないと完全に毒を取り去ることができない。
- ・クロウはヤンの隠し部屋に入って匂いを嗅いでみたがかび臭いだけだった。
- ・テオを迎えに行ったエフェミアは戻ってきてテンジンに、アムトでファミンに詳しくな人を一人一人聞いていく。ドマがファミンに行くことは軍や貴族に呼ばれた時くらいで滅多にない。メイリンがファミンに行ったのも数回だけ。チャンパは割と(都市間の)外交や各都市の首脳会議などでファミンに行く機会が多いようだ。
- ・火葬場は昔からあったようだ。
- ・ドマの黒歴史を見ようとするクロウ。フラウはいったんルノアの影から出てお風呂に入る。
- ・フィミアはルノアにリジェネレートをかけて。エフェミアはルノアをシャワーとドライングで清めた。

迎え

- ・寺院にテオが残っているので、エフェミアは寺院の方にテオを探しに行き、運悪く見つからず結局、街でテオが見つかった。テオはいぶりがっこ(臭いの強い漬物)の屋台近くにおいて鼻が利かなかった。
- ・周囲の男たちがテオに手を出しあぐねていたところにエフェミアが到着。キマシタワー建立となった。
- ・周囲に監視の目は発見できず、不穏な囁きも聞こえなかった。テオとエフェミアはテンジンの屋敷に戻る途中で小さな流れ星が落ちるのを見かけた。
- ・帰り道でエフェミアは、ハンが来てから反乱軍が武力を見せつけることが少なくなったのは、ウオンとハンが結託して略奪行為を控えているだけで、停戦交渉も茶番だったのではないかと思いつけるが、確証はなかった。

情報共有と議論

- ・ドマのしょうらいのゆめの内容には特に不審な内容はなかった。単なる脅迫用のアイテムだった。
- ・天の声が下りてくる。
- 『今回の冒険 情報収集をいいところまでいってそこで止めている事が多いです。もう一步踏み込まないといけなところで撤収することが多いので、心当たりが…どっちかという ない人の方が問題なので、見つめなおしてみましょう』
- ・クロウが拾った謎の粉の臭いをテオがチェックしたが、やはりハンの葉巻の残骸のようだ。
- ・次の日のドマの予定をテンジンに確認したが、ドマは寺院に詰めているようだ。
- ・テンジンが完全武装で下層に討ち入りに行こうとしていたので止めた。(ただのネタ描写だと思われる)
- ・時刻は20時頃。エフェミアはグレートワンズ神殿に話を聞きに行くことにする。ルノアを連れていくためにテンジンに鉄器を借りようとするが、テンジンに止められた。ルノアを連れていくためには担架で運んだり引きずって行ったり匍匐前進させたりと方法を考えるが、ここで無理をさせるわけにはいかないと諦める。
- ・テンジンの屋敷からグレートワンズの神殿までは歩いて30分ほど。鉄器を使うと街を経由することになるので1時間はかかる。
- ・フラウは神聖な空間に入ることができない。グレートワンズの神殿、寺院の仏間、瞑想の間などにも入ることができない。
- ・結局、テオとフィミアとエフェミアでグレートワンズの神殿に向かう。

神殿にて

- ・神殿に近づいて耳を澄ますと、神官が欲望に満ちた懺悔をしていた。
- ・まずはエフェミアが神官と話をしようとするが、エルフで胸の小さいエフェミアは神官の好みではなく、話をさせてもらえない。フィミアも好みではないようだ。
- ・神官の声はテオもフィミアもエフェミアも聞き覚えがない。ハンの声とも似ていない。
- ・テオがエフェミアと交替して話をすることになった。
- ・神官にヤンの部屋から出土した小さな絵を見せると、懐かしそうな反応をする。
- ・改めて小さな絵を見て、黒髪の子はヤンではなくハンではないかと疑うエフェミアだがそうでもなかった。
- ・小さな絵と引き換えに神官と話をさせてもらうことになった。
- ・念のために、黒髪の子と銀髪の子の名前を聞くテオ。神官の答えもヤンとウオンだった。
- ・神官の名前は、ジン・リー。自称アムトのジョニー・デップ。
- ・ヤンもウオンもファミンで拾った戦災孤児らしい。ヤンとウオンが街で戦災孤児を引っ張ってきて、神殿が孤児院のようになってしまったこともあった。
- ・孤児院は孤児たちが成長して自ら助け合うようになって役目を終えた。ヤンはその中心にいた。
- ・ヤンは他人のことを第一に考える子供だった。
- ・アムトの街には元々差別の慣習があって、ヤンはそれを気の毒に思い被差別階級が互いに助け合うようにしたのが革命軍の始まりだった。
- ・今の反乱軍はそこをハンにつけこまれているのかもしれない。
- ・ジンはハンのことを胡散臭い詐欺師みたいな頭をした奴と評した。
- ・ジンはファミンでハンを何度も見かけたことが有る。ジンのところに傭兵を探しに来たこともある。
- ・ウオンやハンの目的が、寺院の書庫の教典や石板である可能性は低そうだ。
- ・ジンは金で情報をリークするかもしれないが、それはちゃんと目的と欲しい情報が分かっている正当な報酬が払われた場合だろう。

天の声

【テオはジンにとって知らない人です。赤の他人もいいところですね。知らない人から知人に格上げするにはどうするか。自己紹介すればもう親友なのか。そうではないでしょう。ジンにどこまでの情報を伝えて、何の情報がほしいか、その情報を何に使うのか。彼は再三、対価は要求していました。それを拒み、別の物を用意せず、頭も下げず、理由も告げず、当たり障りのない会話を繰り返すだけでは、それ以上の進展は望めないでしょう。彼は再三、対価は要求していました。それを拒み、別の物を用意せず、頭も下げず、理由も告げず、当たり障りのない会話を繰り返すだけでは、それ以上の進展は望めないでしょう】

・声を潜めてテオとエフェミアは相談し、ジンにウオンがルノアに重傷を負わせたことを白状し、ジンをルノアが寝ているベッドまで連れて行く。

見舞いと過去の真実

- ・悲しい目をしたジンはテオとエフェミアの案内でテンジンの家へと移動する。
- ・いきなりルノアをくすぐるジン。お見舞いの桃をくれた。
- ・ウォンにやられたと言うルノアにジンが詫げる。
- ・銃を突きつけられればナイフを投げるだろうとウォンを擁護するジン。
- ・何故ウォンに銃を突きつけたのかと聞くジンに、メイリンがヤンの仇だと言うから追いかけていたとルノアは言うが、ジンは狙われるようなことをしたあいつ(ウォンかヤンかどちらかのことかは不明)も含めて因果応報だという。
- ・ウォンがヤンを殺す時その場にいたテンジンに、ジンはその時の様子について話を振る。
- ・テンジンが、**殺されるヤンが笑っていて、殺すウォンの方が苦しうだった**と語られなかった真実を明かす。
- ・ウォンとヤンの間の会話は聞こえなかったとテンジンは言う。**ウォンにはヤンを殺さなければならない理由があったのだ**、とジンは言った。
- ・そしてジンはハンのことを語り始める。**傭兵を探しに来たハンにジンはファミンで裏の仕事をしていたウォンを紹介した。ハンがウォンに依頼した内容までは分からない。ハン**の目的は**金**だと語るジン。
- ・アムトの街から金を搾り取るからくりが分からないルノアとエフェミアにジンはヒントを出す。ウォンがハンに協力したとして、ウォンが反乱軍をまとめるようになってから何が変わったのかを考えてみると。
- ・ハンが金を儲けるからくりは以下の通りだった。
【アムトの街で武力紛争が続くと、ファミンから武器や弾薬などの物資が送られてくる。それを略奪することで稼ぎとする。しかし、紛争の数が減らないと問題視されてファミンから直接戦力が送られかねない。そこでハンが乗り込んで紛争を縮小させることでハンにも名声が入る。そして十分に搾り取ったので終戦祭のパレードを節目としてアムトからは手を引く】
- ・このからくりが表面化したら、関係者、街の責任者、自警団にも責任問題が発生し、市民からの不満も爆発する。そのような街で権力者になるのはリスクが高い。だから長く居続けることはハンも避けたいと思っている。テロも市民に被害が出るのは避けている。これを平和と呼ぶことはできるかもしれないとジンは説明してみせる。
- ・それらを踏まえて考え込むエフェミア。**アムトの街の表面的な平和だけを考えるなら、このまま不正を見逃してハンのやりたいようにさせる方が良い。ハン**を倒して不正を明るみにしても市民が何も得られないなら、**武力紛争の相手が反乱軍から市民の暴動に変わるだけ**。どうすれば良いのかが分からない。さらに考え込む。
- 【この街を直接解放するのは不可能でしょう。不正を暴き、白日の元に晒したとして、新たな火種になるだけです。腐った上層部、苦しんでる者には目を向けない市民、命をかけて踊らされている反乱軍。彼らに残された道は、舞台が幕を引くまで踊り続けるのみ。だが全員がそうなのでしょうか。この街の間に薄々気づき、嫌気がさしている人もいられるでしょう。君たちの行動で世界が変わることはない。差別がなくなる事も、争いがなくなる事も、市民が真実に気づく事もないでしょうが、小さな誰かの願いを叶える事はできるかもしれません。既にパレードを成功させるという目的はたち消えました。貴方達は何のために、誰のために戦うのか、今一度決意を新たにする必要があります】**
- ・なおも困るエフェミアは市民の代表としてテンジンの意見を聞く。テンジンは話は俄かには信じられないが、もしそれを信じるとするなら、**何故メイリンが傷つけられなければいけないのかと憤る。**
- ・メイリンが殺されかけたのは何か都合が悪いものを見たからではないかと推理するルノア。
- ・ウォンは本当に人を殺すことなどなんとも思わない男なのか？とエフェミアは訊く。
- ・**すぐに殺せるはずのメイリンをウォンが殺さなかったのは兄であるヤンの娘だったからだろう。だからといって、ウォンが悪事をしなかったわけではない。有罪で地獄行きだとジンは語る。**
- ・ウォンはファミンで冒険者のようなことをしていたという。ファミンの冒険者なら何か知っているかもしれない。
- ・チャンパについてははっきりしたことは分からないが**【断食と粗食を尊び、自分自身に打ち勝つことを掲げる仏門の、それも副市長ともいう人が、太ってるのはおかしい】**とジンは語る。
- ・アムトの街の市民と下層が仲良くなるきっかけを作りたいルノア。ハン**の罪を問いたいエフェミア**。しかし、具体的にどうすればいいのかが着地点が見えない。
- 【一介の冒険者が街の構造的な問題を解決するのは難しい。不正を明るみにすると街の紛争の火種になる。街にとって一番良い解決は何だろう？】**
- ・一通り話し終わってジンは神殿へと戻っていく。落としどころを見つけられない一行は議論をするが答えは出ない。
- ・ハンを殺してしまった場合について考えてみる。誰が殺したか明確でなければ大丈夫という結果に。
- ・それぞれの思いを胸にその夜は眠った。

目覚めの朝

- ・翌朝、目覚めたルノアは、松葉杖を使って起き上げるようになった。(戦闘やスキルの使用は無理)
 - ・メイリンの様子を見に行くと**メイリンの意識が戻った**。直後にルノアのダイビングボディプレスを喰らう。
 - ・メイリンに誰に刺されたのか訊くルノア。
 - ・**ルノアと別れた後、ばったりとハンに出会って助けを求めようとして、その後のことは、とても痛かったこと以外あまり覚えていない。ハンはいつもの格好だった**ようだ。
 - ・メイリンが家にいると、ウォンが一人で襲ってきたという。マシンピストルの弾をばら撒いて牽制してきたらしい。ナイフを使わなかったのは殺傷力を抑えるためだったようだ。ウォンはメイリンを必要以上に傷つけないようにした。
 - ・ヤンの部屋を聞かれて、メイリンがナイフで追い回して、そのまま山の方まで移動したらしい。
 - ・メイリンは一度だけウォンにナイフを突き刺すチャンスがあった。右肩が上がらないように銃を落とした時、メイリンはウォンにナイフを振り下ろすことができなかった。
 - ・弟子のメイリンを寝るルノア。メイリンの記憶では右肩だったが、**実際にウォンが傷ついていたのは左肩だった**。腕の動きが遅いようだ。(ルノアに左胸を撃たれた後遺症)
 - ・ウォンに襲われた時、メイリンとウォンとの間ではまともな会話はなかった。(ヤローオブッコロツシャー程度)
 - ・メイリンはハンにナイフを渡したつもりはなかった。メイリンがハンに刺された時の記憶は精神的なショックのため、腹部が痛かったことくらいしか覚えていない。
 - ・メイリンはウォンに一瞬のうちに刺されたようだ。生きていたのはルノアとフィミアにトレーニングを受けたからだろう。
 - ・フラウに行き先のメモを残して、一行はそれぞれ散っていく、かと思われたがフラウはクロウの影に入るようになった。
- 【下層探索:フィミア・ルノア 裏山を超えて谷へ:クロウ・フラウ 街を經由して自警団:テオ・エフェミア】**

朝の屋台で

- ・寺院に行く途中で市街地に立ち寄って冒険者たちから話を聞こうとしたテオとエフェミア。屋台で冒険者たちを見つける。
- ・冒険者たちに奢るから噂を聞かせてと頼むエフェミア。怪しがられながらも少しずつ噂話を聞いていく。
- ・ファミンが本拠の**はずのハンだが、ほとんど知られていなかった**。アムトで名を上げたくらいのようなのだ。
- ・**ハン**の使用する兵器はEGGの現代改修版とも言える強化外骨格装甲。今はVAPにとってかわられていて表舞台には出ていない。一般では手に入らないもので、ハン**は軍人という枠をはるかに超えたコネを持っているらしい**。しかし、犯罪組織に疎いエフェミアではそのような人物はあまり思い当たらない。大御所が裏で手引きしたにしては計画が小さく、そのくせ悪目立ちしている。エフェミアの印象では力だけを得た小物という感じ。
- ・ウォンは、**独立ファミンマフィア**の人間だった。マフィアなのに黒い噂がほとんど流れていない珍しい人。金には執着があった。殺しや一般人への追い込み(借金の取り立て)はしないが、**対組織の戦闘員としては相当なものだった**。
- ・冒険者たちに500セレン分ほど奢ってテオとエフェミアは屋台を後にする。

下層強行偵察再度

- ・メイリンに教えてもらった崖からフィミアの力で降りるフィミアとルノア。
- ・ルノアは以前に会った少年のところに行く。後ろからついていくフィミア。
- ・少年の名前はドウジだった。パレードが終わったらウォンが消えるとルノアが言うと少し驚いたドウジ。
- ・ウォンがいなくなってもあるものでやりくりすると言うドウジ。
- ・差別されているのは下層の方だから、市民たちと仲良くするような方法はないと言うドウジ。市民たちからすれば下層の人間などいない方が良いと思っている。
- ・ズオンがリーダーだった頃には平和で争い事も少なかった。しかし、市街地の市民たちが嫌がるから和平は実現しなかった。譲歩しても無駄だと分かった。今は武器と食べ物にはさほど困らないと言う。
- ・終戦祭がチャンスだと言うルノアだが、それもドウジは否定する。そもそもどのような和平になるかドウジたちは聞かされていない。
- ・今は襲撃すれば餓えずに済むと覚えてしまった。食べ物は大体ウォンが奪ってくるからあまり危険な戦闘にはならない。襲撃するのが減るのは良いが、食べ物は手に入らないし武器も手に入らない。以前は貧困が当たり前だったから良いが、今後はどうなるのか心配。
- ・下層は谷底だから土壌も悪い。小さな畑はあるが安定した収穫は得られない。雨が降ったら洪水になり降らなかったら干ばつになる。さらに上からはゴミの山が降ってくる。金になるものがあるならとっくにやっていると言う。
- ・終戦祭では、反乱軍には待機命令が出ている。反乱軍は誰も出動の予定はない。ウォンについては不明。
- ・和平とは言っても、喜ぶのは市民。反乱軍は紛争を起こす機会が減っただけで仲直りではない。
- ・パレードの主演は紛争を減らしたハンであり、反乱軍も自警団も主役ではない。
- ・ドウジもハンことは、強いという以外はあまり知らなかった。(顔がむかつくらしい)
- ・ウォンがリーダーになってからいろいろ変わってしまった。今日(11日目)のウォンはどこかに行っているらしい。
- ・ウォンが来てから食べ物と武器にはあまり困らなくなったが、争い事が増えた。いつ死人が出てもおかしくないくらいだが、誰も殺したり死んだりしていない。
- ・ドウジは幸せに暮らしているのは一部だけだからアムトの街はなくなっても良いと思っている。ドウジが出て行かないのは他に行く当てもないから。
- ・世の中から差別が無くなれば良い。人を不幸にして幸せを得るのはおかしいと言うドウジ。
- ・パレードでハンが私兵を使って反乱軍の襲撃を演出するなら、それを下層の反乱軍が取り押さえる図式はできないか、そこから逃げ出したハンを倒せばいいのではないかと思うフィミア。しかし、そのような情報もないので、理由と損得がしっかりしていれば手を貸してく入れるかもしれない。とフィミアは思った。
- ・反乱軍でウォンの次にリーダーになるのは誰なのかは分からない。反乱軍で傷ついている連中は特にいない。怪我をしているのはウォンくらいのもの。
- ・ウォンの行き先は分からない。ウォンは一人で行動する。谷を經由して上層に行ったかもしれないとドウジは言う。
- ・フィミアとルノアはウォンの姿を求めて谷を走る。

谷から山へ

- ・谷を越えてフィミアとルノアは裏山の東屋の付近まで来た。
- ・東屋には真新しい葉巻の吸殻があった。午前中に誰かがいたようだ。葉巻と言えばハン。フィミアとルノアはウォンのものらしい足跡を追うことにする。足跡は二つあった。
- ・しばらく足跡を追跡すると谷の方へと戻ってきた。ここから足跡は山奥の方に向かっている。さらに第三者の足跡も増えている。山の奥にはまだ誰も行っていない。
- ・山奥へと続く足跡を追っていくフィミアとルノアだったが、途中で道に迷ってしまった。
- ・屋外での活動の経験が乏しい二人は運に任せ、白い鳥を追って山の頂上付近に達した。

託されたもの

- ・山の頂上付近ではハンとウォンが何かを話している。
- ・野外での活動経験が不足している二人では、話の内容は途切れ途切れでよく分からないがハンがメイリンを刺したことを話している様子。
- ・ハンとウォンの契約では、反乱軍には必要以上の戦闘はさせず金を送るが、その代わりにウォンが色々と動くことになっていたようだ。
- ・ヤンは誰一人の犠牲もなく平和を得ることは不可能だと悟った。殺し合いの果てに生まれる平和はない。だから誰か一人がそれを一手に引き受ける必要がある。(ウォンはずっとをれを一人でしていたようだ)
- ・ウォンはルノアやメイリンやヤンたちのような『バカ』たちへの憎まれ口をたたきながら、ルノアとフィミアが自分を見ているのを目で確認して、ハンにヴェノムナイフを突き刺した。
- ・しかし、ヴェノムナイフはハンには刺さらずに二つに折れてしまった。見れば胸が鋼鉄のような真っ黒なもので覆われている。ハンには刃物は効果がないことが判明した。ハンがウォンの首を抱き込んで180° 曲げ、ウォンを殺害した。遅かれ早かれ自分の秘密を知っているウォンは殺すつもりだったらしい。そのまま背中から翼をはやしてハンは飛び去った。
- ・ウォンは命を捨ててルノアとフィミアにハンとウォンの秘密を見せたのだ。
- ・ハンが飛び去ってからウォンのところに駆け寄るフィミアとルノア。ルノアが神聖祈禱で回復を試みると、少しだけ会話をする僅かな時間だけの延命ができた。
- ・ルノアはウォンからハンとウォンの秘密と銃を託された。
- ・会話の後で(恨みのこもった死者たちの?) 無数の赤い手により赤い地の底に連れ去られるウォンの魂。
- ・それぞれに感情をぶつけるフィミアとルノア。
- ・二人はグレートワンズの神殿のジンのところにウォンの死体を届けて弔いと埋葬を依頼する。
- ・そこからテンジンの屋敷に二人は戻った。

谷底に行く

- ・裏山を経由して谷ルートへと向かうクロウとクロウに影入りしたフラウ。クロウは見知らぬ男の臭いを感じて近づいていく。
- ・足音を殺して近づいていくクロウは、白髪で頬に傷のウォンらしい男を発見する。その男を尾行しようとするが運悪くあっさり気づかれてしまう。それでも歩いていく男の歩みは速く、クロウは置いて行かれる前にウォンを呼び止めた。
- ・殺意はないと言うクロウにウォンはルノアの仲間だろうとツッコミを入れる。聞きたいことが有ると言うクロウに、条件次第だとウォンは答えた。ウォンは金と自由を求めているというルノアの情報に従って、大金貨を投げ渡すクロウ。その金額に正気ではないと言いながらもウォンは応じた。
- ・クロウはまずウォンに、ハンとチャンパとウォンで三者結託して利を得ているかと訊く。どうせ手遅れだからとウォンは肯定する。次にハンは何を企んでいるのかとクロウは訊いたが、別に何も企んでいない、表でちやほやされるのが好きな派手好きのおっさんだとウォンは答えた。クロウからハンがメイリンを刺したことを聞くとわずかに驚いたウォン。
- ・クロウはハンを斬るつもりだからウォンに、動くつもりなら手助けに徹してほしいと利を説いて依頼するが、ウォンは損得から話す奴とはもう契約しないと決めていると断る。自分には自分のやり方があるとウォンは言って去ろうとする。
- ・ウォンは敵ではないからと仕掛けないクロウ。メイリンは父の仇のウォンに隙があると分かっている刺せなかったことを伝える。生きると、契約は不要だから、メイリンの心だけは忘れるなど、クロウはウォンの背中に声をかけた。
- ・この場でやり残したことがないかを確認したクロウはテンジンの屋敷へと戻った。
- ・フラウを連絡員としてテンジンの屋敷に残してハンをそれとなく探しつつクロウは寺院へと向かった。

ドマとの対話1

- ・テオとエフェミアは寺院の上層へと向かう。途中で見張りに呼び止められるが印籠の力で何とかクリア。テンジンに会いに回廊を以前とは逆方向に曲がって行く。すると、テラスでぼんやりしているドマを見かけた。エフェミアは声をかけて近づいていく。
- ・話をさせてほしいと言うエフェミアにドマは趣旨を尋ねる。ハンに対して疑いを持っていると言うエフェミアに、言いたいことは分かるが立場も人の耳もあるからと、いったん遮るドマ。ハンの影響力はドマを超え市長すらも超えているという。偽りの平和でも民衆がそれを望んでいるのなら、別に構わないようなことをドマは語る。
- ・エフェミアは、アムトの街が被った損害はどうにもならないかもしれないが、ハンをここで止めれば別の街や地域で同様の被害が起こることを防ぐことはできるとドマを説得する。仕方なしに内緒話のできる部屋へとテオとエフェミアはドマに連れられていく。尾行や盗み聞きを警戒するエフェミア。
- ・ドマの部屋で、改めてドマは、アムトの街が被った損害とは何かを質問する。それに対しエフェミアはチャンパとハンとウオンの企てで分かったことを答えて、この街の損害とは、すなわちファミンから送られてくるはずだったが途中で略奪された物資だと答えた。
- ・ドマの方でもチャンパとハンに不審な動きがあることを認め、アムトの街に損害が発生していることも認めた。しかし、反乱が収束して今後平和になるのならそれでも良いとは言えないが、悪いということもないのではないかと。ハンを断罪したとしても民衆に動揺が走り反乱が増すばかりなら民衆が満足しているのであればこのままでも良いのではないかとドマは問う。
- ・エフェミアは、アムトの街を救う方法を思い出すことができなかつたと白状する。しかし、ハンを放置しておけば、必ず他の地域でまた同じように搾取をするだろう。次かその次の街でハンが悪事が露見して、実はアムトでも同じようなことをしたということが公になったとしたら、チャンパの身柄を求めてファミンの国軍がアムトの街に介入し、遠からず市民にもハンが悪事が伝わるはず。そうなったら市民は暴徒となり反乱軍どころの騒ぎではなくなるだろう。そうエフェミアは説いた。市長はアムトの街は滅ぶと諦めていたが、市民に見えないところでハンを排除することで、そのようなリスクを減らすことはできると、エフェミアはドマを説得した。
- ・この街の市民は与えられた平和・物・ルールで生きている。本当の意味で精一杯生きているのは反乱軍だけかもしれない。それでは街が滅ぶのも道理だろうとドマは言う。しかし、エフェミアはドマはまだ諦めてはいないと言う。テラスでハンと言い争いをしたり、チャンパともやりあったりしている。適当に迎合するようなことをしてはいないのは諦めていないということだとエフェミアはなおも説得した。
- ・民衆を守るのは自警団の務めだと言うドマ。パレードを中止しても、パレードが襲撃されても、民衆は動揺するだろう。パレード終了後に都市の境界を超えたところでハンを討つのが事を荒立てない方法として一番だとドマは言った。
- ・ハン強化外骨格装甲の高速飛行能力で逃げられたらもう追うことはできないとエフェミアは言うがドマもそれへの対策はなく、飛び立つ前に倒すしかないと言う。
- ・ハンが帰る道は、一行がアムトに来るときに使った道と同じ。街道の境界地点に埋伏して奇襲をかけるのが一番良いという結論に達した。ハンは早くてもパレードが終わった次の日に戻るはず。そこを狙えば良い。ハンには、レベルの高い冒険者が来ていることは知らないはず。一行だけがハンたちにとっての脅威となっている。ハンには実力の底が知られていないところが希望となっている。
- ・チャンパがどうして冒険者たちを祭りの警備に呼んだのかチャンパの意図が不明だったエフェミアがドマに確認すると、冒険者を呼び込んだのは祭りに箔をつけるためのハンのリクエストだったことをドマは明らかにした。
- ・さらに、反乱軍には寛大な処置を頼むと同時に、モヒカン頭の一団と反乱軍とは別の組織だと言うエフェミアにドマもそのような反乱軍は見たことがないと同意する。
- ・エフェミアは終戦祭の後のハン始末は任せてほしいと、これは一部の冒険者の暴走であってアムトの街には関係ないことだと、ハンを襲撃することで街に迷惑をかけるつもりはないと宣言した。

ドマとの対話2

- ・協力が得られそうになったドマから主にハンについての情報を引き出していく。
- ・ハンの生活の拠点は寺院内の一室で食事なども寺院から供給されている。普段は下町も散歩している。
- ・ハンの強化外骨格装甲はどこにあるのか把握できていない。寺院のハンの部屋にないのは確か。
- ・ハンがドマと接触し、和平を取りまとめ始めたのはここ2~3年ほど。それ以前にもアムトに来ていたようだ。
- ・ハンの装備を置いてある基地は分からない。(ファミンの方角?)
- ・ハンの身元確認は地方警護隊所属というところまではしているが、その先の出生などについては照会していない。所属先の上官などとは接触したことはあるが、地方警備隊は左遷先でもありあまり勤勉な者はいなかった。
- ・ハンの戦闘を見た自警団員によると、空から舞い降りて不思議な銃弾で戦場を制圧して自警団と反乱軍の間に割って入った。不思議な銃弾は、銃声がせず、一瞬まばゆい光が見えたと思ったら地面に無数の穴が開いていた。後で調査しても弾のようなものは見つからなかった。(連射型ビーム兵器?)
- ・ハンの流暢なアムト言葉はだいが慣れたような雰囲気があった。過去に何度も来ていたらしいので、ドマはそのせいだと思っていた。地方警備隊でもそこまで地方文化に詳しい者はおらず、冒険者でもそこまで気を遣う者はそうそういない。これもハンが受け入れられた要因の一つだろう。
- ・ここで、質問をヤンの方に移す。
- ・ドマも小さな頃によく遊んでもらったらしい。反乱軍に襲われたと聞いたときはドマも下層に行きそうになったらしい。
- ・ヤンが死ぬ前に様子がおかしかったということはないが、【人を殺して得る平和…戦争は、虚しいものだが、戦わずして平和は得られない。それをどうすればいいのか】と、常に考えているところがあり、死ぬ前によくその答えの可能性の一つを見つけたと言っていたらしい。ドマはそれ以上詳しくは訊かなかったが、その想いを誰かが引き継いだのではないかとドマは思っていた。
- ・次に、火葬場の燃料について聞いたが、松の木を中心に木材や石炭を使っているようだった。
- ・そこまで聞いて戻ること。
- ・戻る途中、寺院内でクロウと合流。寺院内は人の往来が多く、情報共有するには危険なので山の方にある東屋で話をしようと移動する。
- ・しかし、東屋の方への道は終戦祭直前で密会や潜伏を防ぐために自警団員によって封鎖されていた。
- ・自警団員に不審な点は見つからず、耳を澄ませても何も聞こえなかったので、いったんテンジンの屋敷に戻るようになった。

情報の共有と整理

- ・それぞれがテンジンの屋敷に戻ってきて情報の共有を行う。
- ・ハンの身体のコールドを考察しようとするエフェミア。体内に強化外骨格装甲を格納するのは無理だが、生体部品をごく一部にして身体の方のほとんどを機械化することは可能だろうと見当をつける。
- ・刃物が効かないハンに有効な攻撃は何だろう? ハンがいつも葉巻煙草を吸っていることからエフェミアはハン的高级機系は少なくとも生体部品が使われているはずだと考えた。ならば、少なくとも呼吸器を攻撃する手段なら有効だろうとあたりをつけた。
- ・クロウはウォンに、ハンがメイリンを刺したことを話したことを明かす。
- ・ウォンに勝ち逃げされたと憤るルノアに、クロウはハンを倒せばウォンに勝ったことになることを告げる。
- ・刃が通らないハンの攻略法について話し合う。
- ・テオは魔法を主軸とした電撃を、クロウは電撃や防御を無視できる技を想定し、エフェミアは呼吸器から攻撃するつもりだという。
- ・夕食後にそれぞれ出かけていくことになった。

神殿・家族葬1

- ・クロウはグレートワズスの神殿に向かった。神殿の中ではジンがウォンの死体に向かって語りかけている。
- ・ジンに文句を言われながらもアツマ流で死者を弔うクロウ。
- ・ジンは最近の事情にあまり詳しくなかった。メイリンのことも気にかけてやってほしいとクロウはジンに頼んでテンジンの屋敷に戻った。

現場検証

- ・テオとエフェミアはルノアの案内でウォンが殺された現場に行った。
- ・たいまつと星霊の灯りで現場に落ちているものを探すエフェミアは**ウォンのナイフで削れたハンの装甲と思われる金属粉**を採取する。金属粉の分析には8時間必要になるようだ。(作業分割した場合、達成値は平均値になる)
- ・ハンの足跡が見つかった。相当重いらしく深く沈み込んでいる。数百kgはありそうだ。
- ・ウォンが投げ捨てられた跡と折れた**ヴェノムナイフ**が見つかった。
- ・怪しげな鹿が見つかったりしたが、それ以外は特に見つからずに三人は下山した。
- ・途中でルノアが分かれて神殿に向かう。

神殿・家族葬2

- ・神殿に来たルノアだったがジンは機嫌が悪かった。
- ・ウォンの遺体に祈りを捧げるルノア。ウォンは良い奴だったとルノアは言い、きっとウォンは嫌がるからそうしてやれとジンは言い、**ルノアに拳銃に冠せられた名『平和のための最終手段』について教え、その解釈を委ねる。**
- ・市街と下層の争いをなくすためにできることはないかと相談しようとするルノア。**街の悪習に根差す対立はどうにもならないが、個人なら救うこともできるだろう**とジンは教え、誰を救いたいのか、何をもって救いとすかは自分で考えろとルノアを促す。
- ・ルノアはメイリンとドウジを救いたい、**彼らの希望が叶うことが救いになると答えた。**
- ・生温かい応援をするジンに見送られてルノアはテンジンの屋敷に戻った。

終戦祭・初日

- ・終戦祭の当日。クロウ・フィミア・フラウ・エフェミアは自警団の仕事に駆り出されて身動きが取れなくなった。自由に動けるのはテオとルノアのみ。
- ・街にはファミンからの観光客なんかも入っている。ハン崇拜でバルーンやら実物大の焼き粘土像もある。
- ・街に出るテオとルノア。仕事中のクロウにはガン無視された。
- ・寺院に入ろうとしたが観光客が入れるラインでしっかりと見張りの目が光っている。
- ・テオとルノアは印籠を手に入れようとして、エフェミアを探す。
- ・メイン通りで警備をしていたエフェミアを見つけて、テオとルノアは印籠を借りる。
- ・貸すにあたって、何かするならばれないように、無茶をしないように、軽々しく喧嘩を売らないように、不用意にドアを開けないようにと念を押して懇願するエフェミア。印籠を使って起きた不祥事はエフェミアの責任となる。
- ・さっそくテオとルノアは寺院の方面に移動していく。
- ・人だかりの中にハンがいた。自警団員に予定を聞くと、もうすぐ昼休みで部屋に戻って、午後は会議に出るという。ハン部屋を聞いたが、教えてはいけないう決まりになっていた。
- ・一行はフィミア以外、ハンに直接会っているし、フィミアも挨拶していないだけでハンに顔を覚えられている。
- ・ウオンを殺した時のハン翼は、横倒しになった馬車をめぐる戦闘の時よりもかなり小型だった。
- ・外見上、ハンに損傷はない。ルノアはこっそりハンに触ってみたが、硬い金属鎧を着こんでいそうな感触がする。ぱっと見では鎧を着こんでいるようには見えない。
- ・次に堂々とハンに触ってみると、金属っぽいプレストプレートを着ているような感触だった。
- ・ルノアは堂々と触ったことでハンファンの群れから殺気立った視線を向けられる。
- ・ハンについてファンと語ろうとしようとするルノアだったがファンのヘイトをもらってしまった。
- ・ルノアはその場から撤退した。

金属粉分析1

- ・エフェミアがヤンの隠し小部屋に籠って、コモンマジックのライトを灯してハン装甲から削り取れた金属粉を分析する。
- ・分析してみると、やや青みがあった魔力を纏っている特殊な金属片だと分かった。ブルーメタルに似てるようで少し違う雰囲気だが、対物理強度、対魔力強度はブルーメタルに匹敵すると思われる。
- ・分析作業は残り5時間。

終戦祭・二日目

- ・自警団の方では特に事件もなかった。
- ・屋台で食べ歩きをしていたルノアは、モヒカン連中がファミンから送られてきた馬車から何かの荷物を運び出しているところに遭遇する。
- ・運んでいたのは、金属できて見慣れないもの。ハンマシンと似た雰囲気があった。
- ・モヒカン連中は金持ちそうな顔をしている者が多い。
- ・よく分からない金属の塊を触っていると暑い時間なのに涼しい顔をしていたり、驚いていたり、様々な反応をしている。
- ・モヒカンたちに聞くと、ハンからもらったという。どこでも冷風が出るらしい。『選ばれた人にこっそりと配る』とのこと。いずれは街全体にいきわたるらしい。
- ・どうやら小型のクーラーらしい。裏にDセルがついていた。魔力は感じない。
- ・触っているうちにルノアは追い出された。

金属粉分析2

- ・クロウが分析に続きを行った。
- ・金属の粉は普通の金属片と違い、粉状になりやすかったと想定された。その事から、表面がザラザラしているものと思われる。折れたナイフと見比べるとさらに仮説を組み立てることができ、おそらくソードブレイカーのように刃を折りやすい形状と性質を持っていると思われる。
- ・ハンの装甲は防御無視無効 ブラストを物理に変換 刃によるクリティカル無効 頑強でない刃の武器を一定確率で破壊という性能が想定される。

クーラー泥棒

- ・ルノアが持ち帰った謎の箱の話に訝しむ一行。
- ・ルノアから印籠を奪ってエフェミアが下層にクーラーを盗みに出かけた。
- ・途中に見張りを印籠でパスして夜の間に紛れて集落の方に移動するエフェミア。
- ・怪しげな箱がこの先普及するらしいという住民の話を持ち聞きする。
- ・なおも間に紛れて物色していると鉄器の中に一つだけ怪しげな箱が置いてあるのを盗んでくる。
- ・夜の間に紛れてそのままテンジンの屋敷へと戻ってきた。
- ・さっそく怪しい箱を分析するが、特にハンの戦闘を補助するものではないようだ。構造も単純で、ただの便利な鉄箱という以上の価値はないようだ。鑑定したらただの冷風発生装置だった。

終戦祭・三日目

- ・自警団のメンバーは自警団に出勤する。昼からパレードが行われることを知らされる冒険者たち。ルートは普通に大通りを一周するだけらしい。
- ・ルノアとテオはメイリンと少し話をする。
- ・ハンの顔は見たくないというメイリン。何を目的に生きればいいのか、何に復讐すればいいのかを見失っている。ヤンもウォンもメイリンもこんなこと(ハンが美味しいところをすべて持っていくこと?)のために生きていたのではない。
- ・ルノアがヤンとウォンが生きだした目的の話振ると、メイリンはみんなが幸せになるための道を探していたのではないかと言う。メイリンにはその道を継いでほしいとルノアは言い、メイリンは頑張ると答えた。
- ・一方、昼頃からパレードが始まった。
- ・平和の祭典なので目立つ武器は装備せずノーマル装備のハンが自警団長が御者をしている鉄器に乗っている。曳いている馬は二頭。護衛の兵士たちも剣すら持っていない。ハンの演説が始まる。ハン『アムトの皆様、此度は真なる平和への第一歩として、このような式典を開催頂き誠にありがとうございます。ただいま、世界では少しずつ武器による争いが減りつつあります。その背景として、今や世界の各地に機械というものが次々と開発、浸透しているからです。私もその機械というものに着目し、その利便性を知ってもらおうと、何台かプレゼントをさせていただきました。今はまだ少数ですが、いずれ全ての人に行きわたるよう、精進したいと思っています。新しい文化を受け入れることは難しいかもしれませんが、少しずつ、皆様の生活と安全の向上に助力できればと、思っております。それでは、引き続き終戦祭をお楽しみください。今後争いはどんどん縮小して、数年以内に完全に消滅することを約束しましょう』
- ・歓声に包まれて戻っていくハン。その後、祭はクライマックスを迎え、賑わい、夜まで続いた。自警団組はその後、自警団からの労いや挨拶などをして、午前一時くらいまでかかる。
- ・怪しげな箱はかなり高価なはず。Dセルですら一般人には一生かかって払うような高価なものだ。

打ち上げ

- ・労いの宴でドマと話をするエフェミア。しょうらいのゆめと印籠を返却する。
- ・ハンが機械を住民にいきわたるようにさせるという話は、ドマには聞かされていなかったようだ。ハンには独自のコネクションがあるようだが、詳しいところはよく分からない。ハンが街から出るのは正午ごろの予定らしい。
- ・ドマは機械が好きではない。守るべき伝統と風趣がある。しかし、市民からはそのような意識が消えつつある。
- ・輸送の馬車の兵士が殺されることは全くないわけではない。馬車の乗り手は狙われる。前回兵士が殺されたのは単純に邪魔になっただけだろう。それは一番明確な理由だろう。平和のための礎や怨恨などではなく生きるために必要だったのなら、ドマは蔑むことはできない。なぜ殺したのかは分からないが、そこまで悪意があったとは思えない。
- ・利便性が増すにつれ民度が下がるが、今は流れに任せる。ハンが機械を配布するのには裏がありそうだが、今のところ取り締まる口実がない。価格から考えて市場経由ではないどこかから調達しているのだろう。
- ・クロウからは国を閉ざすと停滞につながると言われ、ドマは注意を払うという。
- ・契約書で縛られるような法形態ではないので、怪しげな箱をもらったことで借金地獄に陥るような詐欺はできないようだ。

最後の夜から最後の朝へ

- ・自警団の仕事も終わって全員がテンジンの屋敷で合流する。
- ・テオは下層を見に行っていたが、特に騒ぎのようなことは起きていなかった。街の方も見たが、ハンの演説のおかげで活気が出ていたように見えた。一部の層には抵抗感を示すものもいたが富裕層は利益を当て込んで異文化の取入れにも寛容になっているようだ。
- ・次の朝にテンジンから、自警団の報酬をもらった。詳細はリザルトにて。また、ハンが正午頃に出発すると改めて情報が入ってきた。その情報は市民には公開されない。
- ・ルノアは異端審問官の方であるオートヒーリングにより完治していた。
- ・フラウは何を守る対象にすればいいか少し迷った。
- ・箸をチンチン鳴らして朝食を待つメイリンは独自の行儀を心得た。そんなメイリンにルノアからヤンが残した資料が渡される。目標を見失っていたメイリンだったが、これで目標を改めて持つことができたようだ。
- ・ハンを襲撃するために街道の方に行こうとした一行だったが、歩きではハンに追いつけないことが判明する。慌ててテンジンから鉄器を借りることになった。
- ・一行は街を出る冒険者たちの中の第一陣だった。自警団のメンバーが見送りに来ていた。ドマは多くを語らず敬礼で見送った。高所の東屋ではヤンとウォンとジンが描かれた小さな絵を立てかけたジンが酒を飲み煙草を吸いながら一行を見送っている。

奇襲準備

- ・街道上でハンに奇襲をかけるために移動をした一行だったが、街の境には奇襲に向いた場所は見当たらない。鉄器と馬を遠ざけようとして出発したエフェミアだったが、行きにモヒカンに襲撃された地点が奇襲向きの地点だったと思いなおし、一行のところに戻り、襲撃位置を変えようと、一行が行きに襲撃された地点に移動させる。
- ・移動してきた一行。そこには高所があり射撃戦で高所をとることができる。しかし、高所をとるためには道から60mも離れる必要がある。しかし、射程60m以上の有効な攻撃手段を持つのはクロウのみ。
- ・仕方ないので襲撃された馬車に残骸に着目し、馬車の残骸に隠れることにする。すでに幌などは持ち去られた後だったので、手持ちのテントを解体してエフェミアが偽装用の幌を作る。ただし、馬車に隠れることができるのは二人だけ。
- ・エフェミアが原案として、【高所:クロウ】【馬車の中:テオ・ルノア】【テオの影の中:フラウ】【インビジブルエアで身を隠す:フィミア・エフェミア】を提案する。フィミアはどうせ飛ぶからと高所に陣取ろうかと検討する。
- ・この時点でハンがこの場を通過するのは半日後と想定される。見張りを立てる必要があるため、エフェミアが奇襲地点から4~5kmアムト寄りの地点に移動して見張りをする。
- ・夜になってハンが馬車が峠地帯の前で野営に入るのが見えた時点でエフェミアが戻って仲間に報告をする。
- ・馬車は三台、ハンと身なりの良いグレートモヒカンが三人いる。ハンは軽装。グレートモヒカンはライフルを持っていた。
- ・ハン側の能力が明確ではないため夜襲はやめて、翌日に待ち伏せからの奇襲をかけることになった。
- ・少しでも情報を得るためにエフェミアが夜陰に紛れてこっそりと近づいて野営の様子を見た。声は風のせいでよく聞こえない。
- ・エフェミアの忍び歩きでも、グレートモヒカンは何か聞こえたようで反応をした。どうやらレベル7程度の手練れようだ。ハンと三人のグレートモヒカン以外には人はいない。
- ・グレートモヒカンはライフルにハンドガン、射程が2~3mほどの火炎放射器(15点ほどの炎属性プラストと炎上)で武装している。また、夜中なのにサングラスをかけている。フラッシュ対策か？
- ・背中に背負った火炎放射器用のタンクは部位破壊で傷つけた後なら発火するかもしれない。
- ・そのまま翌朝を迎え、ハンたちの馬車隊は奇襲地点に差し掛かった。
- ・前方に馬車二台と、その間にグレートモヒカン一人。後方に少し豪華な馬車が一台。ハンとグレートモヒカン二人は馬車の中にいるようだ。御者はノーマルモヒカンで、戦闘では数に入れない。(モブというか背景扱い)
- ・前方の馬車と後方の馬車の間の距離は約10m。
- ・歩いているグレートモヒカンは前方を警戒している。昨夜のエフェミアの偵察は気づかれていたようだ。
- ・馬車の残骸に張ってある幌に気づいたグレートモヒカン。しかし、テオとルノアは身を隠すのに成功する。
- ・そのまま通り過ぎようとしたところに、エフェミアが氷獄タルヒで馬車の残骸の反対側から奇襲をかける。

奇襲！グレートモヒカン

奇襲ラウンド

エフェミアの氷獄タルヒでノーマルモヒカンは吹き飛ばされ、馬車を曳いていた馬は全滅する。歩いていたグレートモヒカンもダメージを負う。馬車の中からグレートモヒカンの残り二人も出てくる。そこにフィミアがサモン・トールで、トールの戦艦を呼び追い討ちをかける。さらにテオがグレートモヒカンに浴びせ蹴りを命中させる、投げへの連携は避けられるが、続いて繰り出した裏拳にモヒカンは何回転もしながら吹き飛ばされた。**グレートモヒカンAを撃破**。ルノアは飛び出してきたグレートモヒカンに銃撃をかけるがそちらは躲かれた。フラウはテオの陰から出現。クロウは高所でハンが出るまで待機している。

1ターン目

フラウは騎士宣言でグレートモヒカンを引き付け、ルノアは見えざる鷲の舞を舞う。テオはにゃんこの構え、クロウは高所で死番の悟と暗霧を発動。
エフェミアは微妙に前進しながらさらに氷獄タルヒでグレートモヒカン二人を攻め立てる。テオはグレートモヒカンCに当身からの投げ連携を決める。
投げで倒されたグレートモヒカンCは起き上がり、グレートモヒカンBはフラウとルノアに火炎放射。しかし、見えざる鷲となったルノアには躲かれて、ブルーメタルの鎧に身を包んだフラウには全くダメージが通らない。二人が炎上しなかったので、エフェミアは炎による攻撃を見せられたが何とか耐えることができた。
フィミアはゴア・ボルグでグレートモヒカンBに連続で刺突を仕掛けるがかわされ、ルノアのファニングは一発がグレートモヒカンBに命中する。かすただけだがグレートモヒカンBは被弾したところから血を噴き出してのけぞった。人間には攻撃したくないフラウはそのまま攻撃を放棄する。

2ターン目

フラウは騎士宣言を継続し、ルノアも見えざる鷲の舞を継続、テオもにゃんこの構えを継続する。
エフェミアが三度氷獄タルヒを発動して**グレートモヒカンB・Cにとどめを刺した**。

ハン出現

ハン「……およそ30秒か。まあ、持った方だな」

・横転した馬車の天蓋が盛り上がると、内部から馬車を破壊するように、アイアンファルコンのハンが登場する。モヒカンたちが戦闘している間に装備を付けたようだ。

フィミア「え。まさか…わざわざ終わるの待ってたの……？」

ハン「……一人いないようだな。どこかに隠れているのか？まあ構わん。隠れているなら引きずり出すまでよ」

・ハン是不敵な笑みを浮かべている。

エフェミア「……………他とは違うって分かってたんですね」

ハン「当たり前だ。私の目は貴様らのことをすべて頭の中に記憶し、解析する。これぞ機械によって進化した新人類の力よ。時代はいずれ機械によって進化する。環境も、生活も、人もだ」

エフェミア「機械によって進化ですか。それって本当に人間なんです？ 例えば、その頭。多分そこに脳は入ってませんよね？」

ハン「否。人間ではない。それより上位の存在へなるのだ。まあ、それはいい。それより、何の用かと、一応聞いておこう。まさか握手とサインを求めに殺人を犯したわけではあるまい？」

エフェミア「人間ではないそうです」

フラウ「…。…うん」

エフェミア「サインですか。自白調書になら書いてもらっても良いかな？ 殺人教唆とか詐欺とか、色々ありますよね。まあ、そんなつもりは私にもあなたにもないでしょうけど。何年計画だったかは知りませんが、人を使ってアムトの街を散々食い物にしてきたあなたを倒しにきました。もうこれ以上に悪事を犯さないようにです」

ハン「くだらん、法廷にでもかけようともいうのか？どこまで突き止めたのかは知らんが…私も部下を手にかげられた。あとは正当防衛として、軍に貴様らを送り届けてやろう…物言わぬ死体としてな」

エフェミア「その方が気が楽です。安心してあなたの活動を停止させることができます。あなたはもう人間としては死んでいます。ただの妄執のこもった機械人形です。やれるものならやってみなさいっ！」

・ハンの識別は運転(知識)で可能。

ラストダンス

・ハンに戦術学勝負を仕掛けたがあえなく敗北した。
・賢者の眼鏡でハンを識別。

虚偽の英雄ハン&アイアンファルコン Lv12 種別:人間/魔法生物/ 属性:無 弱点:純魔力(ベース+10)・??? 抵抗:斬撃(クリティカル無効) 耐性:ポスランク・精神無効・束縛無効・ダメージ以外の毒無効

P:【超合金Φ】禍々しい怪しい金属。ブルーメタルを元に精製されている。基本的な効果はブルーメタルに準拠する。また、破壊耐性のない刃のついた武器で攻撃する際、命中もしくはダメージダイスが4以下の場合破損する。

P:【鋼鉄の翼】常時浮遊、任意で飛行を付与。翼の耐久度は60 物理防御18 魔法防御15 鋼鉄製 頭上からの攻撃及び射撃攻撃・射撃魔法でのみ指定可能

D:【衛星ドローン】Dタイミングで起動 ドロンを4基展開する。それぞれ 雷 炎 氷 土 の属性のバリアを張る バリア展開中は対応する属性のダメージが半減。

武装:【Ex-ミニガン】A行動 命中20 プラスト18 鎧通し の攻撃を6回行う 対象はそれぞれ選択可能 連撃ストップ系の回避スキルで自身への攻撃はすべて回避可能。射程30m。

1ターン目

宣言は以下【フラウ:騎士宣言(24) テオ:流水制空権圏 ルノア:見えざる鷲の舞 クロウ:水天一碧 死番の悟、暗霧】

ハンが鋼鉄の翼を広げてエフェミアにチャージアタック。翼のブレードでエフェミアを斬る。アクロバット回避に失敗したエフェミアはブルースフィアでなんとか傷を広げずに済んだ。

フィアのゴア・ボルグ投擲、フラウの斬撃は追撃も含めてかわされる。テオが走りこんで左右の拳と蹴りを打ち込むが、片方の拳が入るのみ。ルノアの銃撃もヒットする。衝撃で押し返されるハンだが装甲に止められている。エフェミアは迅雷ナルカミを撃ち込むがハンが両肩に装備されていた防御ドローンに威力を半減させられてしまう。クロウはまだ時が満ちていないと機会を待つ。

2ターン目

宣言は以下【フラウ:騎士宣言(19) テオ:流水制空権圏・にゃんこの構え ルノア:見えざる鷲の舞 クロウ:水天一碧 死番の悟、暗霧】

ハンは一歩をロックオンしたうえでEXミニガンを掃射する。テオは華麗なバックステップでかわし、フラウは剣をかざしてダメージを殺すが、ダメージを負って鎧の隙間から血を流す。エフェミアはアイギスを使用して何とかダメージを退ける。ルノアはローリングショットを仕掛けるが被弾。マジックアミュレットを割ることになった。反撃の銃撃もかわされてしまう。

エフェミアは対ハン用の秘策として準備していたアシッドクラウドでハンに大ダメージを負わせることに成功する。ハンの内臓はまだ強化されていなかった。調子に乗ってハンと舌戦を繰り広げるエフェミア。フラウは斬撃で、フィアはゴア・ボルグを投擲することで雷属性を防御するドローンに攻撃を集中、これを撃破することに成功する。雷属性を防御するドローンが落ちたことで時が満ちたと確信したクロウはハンに翼に迅雷を落とす。しかし、ダメージは通ったものの鋼鉄の翼は強靭な防御力を見せつけた。テオは浴びせ蹴りからの拳の連打を打ち込む。蹴りと片方の拳がハンをとらえた。

3ターン目

宣言は以下【フラウ:騎士宣言(26) テオ:流水制空権圏・にゃんこの構え ルノア:見えざる鷲の舞 クロウ:水天一碧 死番の悟、暗霧】

ハンが再びロックオンからEXミニガンを掃射。テオはウィーピング8でかわし、フラウは剣を使って防御。三発が集中したフィアは盾をかざしたが最初の一撃で体勢を崩し全てもらってしまう。しかし、マジックアミュレットとエフェミアからのブルースフィアの援護で踏みとどまった。

一行の反撃は激烈を極めた。エフェミアが迅雷ナルカミを曲射することでハンに翼にダメージを蓄積し、フラウが飛翔しながらアイアンファルコンを一刀両断にする。ハンに翼は破壊され、回避力が落ちた。フィアは自己回復をして、テオが瞬時にフラウの傷を回復する。高所からのクロウの迅雷がハンを打ち据えた。ルノアが胸の間から弾丸をポップアップさせて一瞬でリロードを完了させてファニング。マグナム弾がハンに喉元と胸を貫通。ここで勝負は決まった。

爆発。虚偽の英雄の最期

- ・オイルのような血を吐き出しながらハンが最後の言葉を吐く。
- ・ハン「…まさか、このようなところで、敗れるとは……無念。ファイロード様…いつか、機械の世界を作り人々を高めへとお運びください」
- ・ファイロードという神殿がハン信仰対象だったらしい。ハンが両手を天に伸ばしたところで血のようなオイルに引火してハンが炎に包まれた。炎恐怖症のエフェミアが取り乱して逃げ出す。そして大爆発を起こしてハンが聖印だけ残して跡形もなく消え失せた。
- ・聖印はファイロードという最近作られた団体のものようだ。【機械というものは人類の発明ではなく、偉大なる神ファイロードがもたらしたものであり、いずれ機械が世界を支配する足掛かりである】という神殿らしい。どこかの裏組織が運営をしているようだ。
- ・一行は痕跡になりそうなものを回収して帰還していく。

エピローグ

- ・後日、ホオツキの船内でファミン在住の者から、一行はこういう話を聞いた。
- ・英雄ハンが道中何者かに襲われ行方不明になった。アムト、ファミン両軍が捜索を行ったが、手掛かりをつかむことはできなかった。唯一発見されたのは、破壊された馬車と戦闘の痕跡、そして何かが燃えた跡だけ。その痕跡には、残骸らしいものは見つからなかったという。
- ・アムトは市長が引退し、副市長と政権を交代したが、自分中心的な政治、運営、そして市財を私欲に使ったことが発覚し更迭。アムトは現在、ファミンの管理下に置かれつつも、自警団、上層市民、下層市民の3つのグループでそれぞれ代表者を設立。ファミンからの進言で貧富層の軋轢を少しずつ減らしながら、3つのグループで話し合い1つの都市として発展させるよう向かっているようだ。
- ・いつしかメイリンたちが、その代表の名に立候補するかもしれない。
- ・こうして、陰謀に巻き込まれ騒乱が続いていたアムトに、ようやく本当の平和の兆しが見えた。その裏で暗躍したもの、活躍したもの…それらは誰にも知られることなく、静かに街を去っていった。

リザルト

経験値:16000 賞金:一人24000 経過週:2週間 FP:Lvx3点 名声:12点

おまけ

- ・冒険から戻ったエフェミアがこの件について保護者のミレイユに報告し、ミレイユはヘラにファイロードのことを聞いた。どうやらファイロードもまたPET傘下の組織だったことが分かった。こちらは機械を中心とした組織だったらしく、世界に機械をばらまいて人を機械に頼るようにさせて、何らかの陰謀を企んでいるようだ。また、超合金Φは完全にブルーメタルの性質を持つてはならず、何らかの弱点があるようだ。
- ・彼らは常識の範囲外から攻撃してくるようだ。

時系列

1日目	ホオヅキからファミンへ移動。馬車でアムトへ移動開始。
2日目	
3日目	
4日目	反乱軍に襲撃される。 メイリンを救助。メイリンがルノアに弟子入り。
5日目	アムトに到着。 メイリンの家に入る。ルノアとテオ以外は自警団の登録を受ける。メイリンの父ヤンの話などを聞く
6日目	テオとフィミアが主要道を散策。エフェミアはシーフギルド捜し。クロウは軍事的な考察をしながらの散策。フラウは路地裏や背の高い建物を探しながらの散策で屋台で豚串を買ってくる。ルノアはメイリンと銃の特訓。メイリンに銃を持たせるとやばいと分かった。
7日目	テオとフィミアは寺院へ。クロウは散策を継続。フラウとエフェミアは屋台で噂話。ルノアはメイリンと共にごみ溜めへと向かった。市長と副市長が瞑想に入る。メイリンもルノアも何とか生還した。
8日目	夜明け前に馬車が反乱軍に襲われる。メイリンを守るフィミア以外は自警団について出撃する。自警団と反乱軍との戦闘は反乱軍が怪我人を出しつつ降伏し、ハンがその場を収めた。午後はメイリンがマニ車にお祈りしに行く。フィミアとクロウは寺院のテラスでドマとハンの喧嘩を見かけ、ルノアとテオはグレートワズズの神殿で神官の話を書く。エフェミアは寺院から登山道に出て東屋を見つけた。夜に飛び出したルノアはウォンらしき男を追跡したが悟られて瀕死の重傷を負う。
9日目	瀕死の重傷を負ったルノアを治療。ヤンの部屋からヴェノムナイフや反乱軍の情報や毒物などが見つかる。自警団の召集があった。早くても昼頃まで、大体夕方までは拘束される予定。目覚めたルノアはテオと情報を共有。ルノアの病室にごみ溜めの少年が現れ、メイリンが狙われていることを告げる。ルノアが病室を飛び出した。裏山でメイリンとウォンが対峙しているところにルノアが割り込んで再戦、痛み分けに終わる。一度バラバラに分散した一行はテンジンの屋敷に集結した。ウォンによる襲撃の現場検証後、帰ってきたテンジンと情報を整理する。
10日目	自警団による拘束は無し。ルノアはテンジンの屋敷で寝たきり状態。フラウはルノアの影の中で待機。フィミアはチームを組むメンバーと街に出かける。クロウは戦闘現場の調査。テオとエフェミアは寺院を探りに行く。クロウとフィミアは現場検証で謎の粉を拾い、エフェミアは市長と接触して、助言をもらいつつ権限を得るためのアイテムを得た。夜に情報を共有。流れ星が落ちた。テオとフィミアとエフェミアでグレートワズズの神殿に話を聞きに行き、神官ジンにルノアが重症であることを打ち明けルノアの元に連れてきた。
11日目	メイリンの意識が戻った。メイリンからウォンとの戦いやハンに刺された時のことを聞く。クロウとフラウは裏山に、フィミアとルノアは下層に、テオとエフェミアは寺院に向かった。ウォンは谷でクロウと接触した後、東屋経由でハンと一緒に山奥に向かった。下層から谷を通して裏山に迷い込んだフィミアとルノアはハンがウォンを殺すところを目撃した。その夜、クロウは神殿に行き、テオとルノアとエフェミアはウォンが殺された場所の調査を行い、ルノアは神殿に立ち寄った。

12日目	終戦祭初日 クロウ、フィミア、フラウ、エフェミアは自警団の仕事。テオとルノアは終戦祭の街を巡る。エフェミアが金属粉の分析を途中までした。
13日目	終戦祭二日目 ルノアが怪しげな金属の箱を運んでいるモヒカン連中に遭遇する。エフェミアが夜陰に紛れて金属の箱を調達してきた。
14日目	終戦祭三日目 終戦際のパレードが無事に行われた。ハンが機械をいきわたらせると演説をする。打ち上げでドマとハンや街の今後について会話をする。
15日目	朝にテンジンから自警団の報酬を受け取る。メイリンにはヤンの残したメモを渡した。一行は街を出て、行きに襲われた地点へと移動してハンを待ち受ける。ハンたちは奇襲地点に入る直前で野営をする。エフェミアは夜間に偵察を行った。
16日目	朝にハンたちの馬車は野営地点を出発。一行はそこに奇襲をかけ、ハンを倒すことに成功した

ネームドNPCリスト

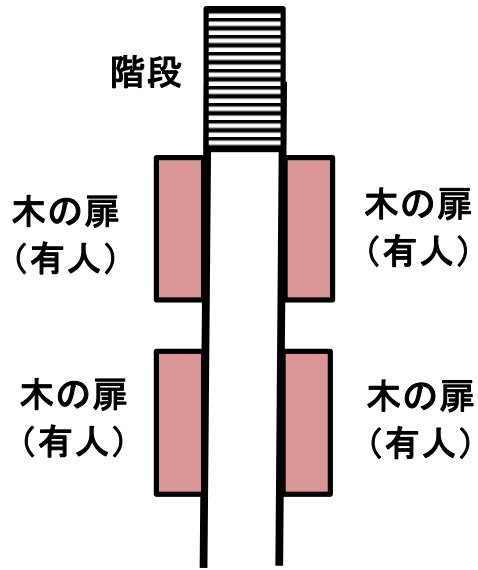
<p>ハン</p>	<p>故人。虚偽の英雄ハン。北帝国シンの軍人で最下級の兵士。北帝国シンの地方都市アムトに平和をもたらした調停者としてアムトでは知られていた。アムトでは戦災孤児のコミュニティから発展した下層区域と一般の市街地に住む市民との間に、差別意識に根差す深い溝が穿たれ、武力闘争が頻発していた。そこに乗り込んだ彼は市街地の自警団と下層区域の反乱軍との戦闘の間に割って入り停戦交渉をまとめ武力闘争を激減させたと言われている。しかし、実際は下層区域の市民の武力闘争はハンが雇ったウォンに率いられた反乱軍が主になっていた。ハンがもたらしたと言われている平和は彼がウォンに命じて反乱軍に武力闘争を控えさせただけの結果に過ぎない。それだけでなく、ハンが副市長チャンパと結託し、アムトに首都ファミンから送られてくる物資をウォンに命じて略奪させ、それを資金として利用していた。彼の犯した犯罪は一般には知られていない。彼の本質は矮小な人間であり、たまたま力を手にした小悪党にすぎなかった。</p> <p>実は機械を信仰するファイロードという教団の信者であり、アムトの市民に機械文明を広めて機械に頼る生活に慣れさせて教団を進出させるための足掛かりにしようとしていた疑いがある。実際に彼は死の直前に下層区域と市街地とに簡易クーラーをばら撒き、やがて全市民が機械の恩恵を受けられるようにすると演説をしていた。ただし、彼はあくまで信者であってファイロードの神殿の運営に関わっていなかった。</p> <p>彼自身は高い戦闘能力を有していた。その戦闘能力の根源は機械化された彼の身体にあった。彼の身体はブルーメタルに近い性質を有する超合金Φで構成されていて、特に刃の付いた武器に対しては強力な防御力を有していた。背中に背負ったアイアンファルコンで高速飛行をすることも可能。彼の武装EX-ミニガンも目標の鎧をやすやすと貫通することができ、一度に6発の連射が可能だった。さらに防御面では四基のドローンによって、炎・氷・雷・土の属性のダメージを半減させることができた。ただし、純魔力による攻撃に対しては脆弱であり、それ以外にも超合金Φの欠陥による弱点を有していたようだった。</p> <p>ホオヅキの冒険者たちと激しい戦闘を繰り広げたが、最後はフラウにアイアンファルコンを真二つに両断されたうえで、ルノアの銃撃でとどめを刺され爆発した。爆発後に回収できたのはファイロードの聖印だけだった。</p>
<p>ロサン・ツーツァン</p>	<p>アムトの市長。白髪の老人で前髪が長い。盲目で政治の実権は副市長のチャンパに渡していた。ホオヅキの冒険者がアムトに来た時には既に盲目であり身体も衰えていた。政治家というよりは仏門の高僧のようで、膨大な数の経典を所有していた。彼は副市長と共に瞑想に入り、その後で政策の決定が行われていたが、実際に瞑想によりお告げが得られるわけではなかった。瞑想は政策に説得力を与えるための儀式と化しており、瞑想に使う時間もチャンパが耐えられないため二日間と短めになっていた。この、市民を騙すような行為は本来あってはならぬことと考えていたが、今は既に諦めているような態度だった。遠からずアムトの街は滅びるがそれも天命だと思っていた。ハンが死亡した後で正式に市長を引退した。</p>
<p>チャンパ</p>	<p>アムトの副市長。小太りで人相の悪い男。祭政一致している感のあるアムトの街の副市長にしては仏門への帰依が甘く、瞑想・断食も市長が一週間以上耐えられるのに対し、二日間が限度だった。瞑想が終わった後で女官から呆れられながらニラ饅頭を暴食する様子をエフェミアに目撃されている。自警団長ドマとは折り合いが悪い。</p> <p>実は虚偽の英雄ハンと結託して私腹を肥やしていたようだ。ハンの死後に、前市長の引退により市長となったが、自己中心的な政治運営や市の財産を私欲に使ったことが発覚し更迭された。</p>

ドマ	<p>自警団長。市長ロサン・ツーツァンの息子。二十台の黒髪イケメン。ホオヅキの冒険者への警備依頼は彼の名義で行われていたが、実際は冒険者を警備につかせるのはハンの意向だった。彼自身は冒険者など呼びたくはなかったらしい。ハンとチャンパの悪事を薄々知りながらも、表面的ながらも平和が訪れるならそれでも良いと思っていたが、エフェミアに説得されて、ホオヅキの冒険者に。ハンとチャンパとは折り合いが悪かったようだが、彼の方が立場が弱く、ごり押しされていたようだ。メイリンの父ヤンやテンジンは子供の頃から知っていて、よくヤンに遊んでもらったとのこと。</p> <p>子供の頃に黒歴史となる『しょうらいのゆめ』なるものを書いてしまい、それを音読されることが弱点だったが、その音読をネタに強請られるのは何とか回避し、市長からそれを預かっていたエフェミアより返還されている。</p> <p>ハンを倒しに行く一行に、必要以上に言葉をかけるわけにもいかず敬礼で見送った。</p>
メイリン	<p>このシナリオのヒロイン。まだ子供だが彼女なりに色々考えている。最初の登場時は、父ヤンを殺した仇である白髪の男を殺すために、ファミンで武術家を探していた。一行と一緒にアムトに戻る途中に、ハンの手下と思われるモヒカンたちに襲われたところを一行によって馬車の残骸の中から救い出された。</p> <p>そこからルノアに弟子入りし、フィミアからも特訓を受けて、生き残る術を身につけた。登場時は憎しみにかられた復讐者だったが、いつの間にかノリの良い少女へと変貌を遂げていた。</p> <p>育ての親のテンジンが、目的のために死ぬことはできるが、誰かの死を背負って生きていくことはできないと言った通り、ウォンがテンジンの屋敷を襲撃した時に、ウォンと対決をして、ウォンに隙ができたにも関わらずヴェノムナイフで刺すことができなかった。</p> <p>ウォンとの対決の直後にルノアと別れてからハンに刺され重傷を負った。ウォンがハンに殺されて生きる目標を見失っていたが、ヤンが下層と市街の市民が融和する方法を検討した資料をルノアから渡されて、再び目標を取り戻した。</p>
ウォン	<p>故人。 反乱軍のリーダー。白髪で頬に十字の傷の男。兄であるヤンと一緒にジンに拾われてファミンからアムトに移ってきて育った。一度ファミンに戻って、独立系のマフィアの戦闘員として名を馳せた。マフィアに雇われていながら黒い噂もない珍しい男だったが、ハンがジンの元に傭兵を探しに来た時に、ジンからハンに紹介された。そこからハンに雇われたらしい。</p> <p>ハンに雇われてから、その時の反乱軍(当時は革命軍)のリーダーだったヤンを殺す羽目になった。ヤンの【戦わずして平和は得られない。ならば戦いを誰かが一手に引き受ければ良い】という思想を受け継いで、下層で嫌われながらも、殺しなどの汚い部分を一手に引き受けて、できるだけ下層の者たちが危険に巻き込まれないようにしていた。</p> <p>ルノアとは二度戦って、重傷を与えている。テンジンの屋敷を襲撃した時も、兄の娘であるメイリンを殺すことができなかった。メイリンを刺したハンに対し納得がいかず、ルノアとフィミアが隠れて見ているのを意識した上で、ハンの身体の秘密を二人に教えるために、ハンを刺そうとして返り討ちに遭い殺された。</p> <p>彼の魂は彼に対する恨みを持つ者たちのものらしき赤い腕によって赤いところに引きずり込まれた。</p>

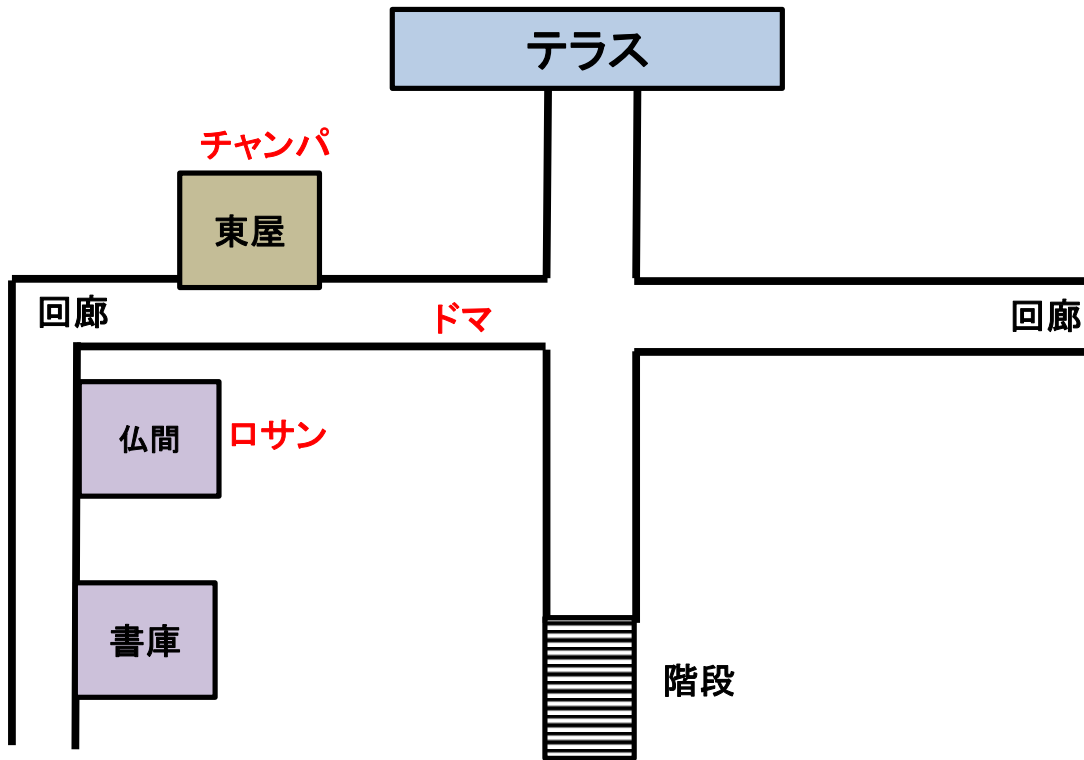
<p>テンジン</p>	<p>メイリンの養父。自警団員。三十台の物腰柔らかな人物。ヤンと義理の兄弟でありドマとも幼馴染。父は大きな農家だったようで郊外の大きな家にメイリンと二人で住んでいて、メイリンを助けたお礼に、一行のために部屋を貸してくれた。また、ハンとの戦いに向かう一行に鉄器と馬を貸してくれた。(返却できたと思いたい)</p> <p>ヤンの死後に、ヤンの隠し部屋を偶然発見してヤンが元反乱軍のリーダーだったという秘密を知っていた。また、ヤンが死ぬところを目撃していて、殺されるヤンが笑顔で、殺すウォンが苦しげだったのを覚えていた。</p> <p>市街を守る自警団員として、あくまでも街に従うつもりであったが、もしもの時にはウォンを倒すために生命を賭ける覚悟はあった。大体は常識人のように見えたが、重傷を負ったメイリンに一族に伝わる怪しげな薬を投与しようとした。</p> <p>メイリンが危険なことをすることを心配していて、できればメイリンが父の仇をとろうとするのを止めてほしいとまで言っていた。ウォンの死後に生きる目標を失ったメイリンに、生きる目標を取り戻してくれたルノアに感謝していた。</p>
<p>ヤン</p>	<p>故人。帝国語表記で「楊」。メイリンの父であり、ウォンの兄であり、テンジンの義理の兄で、ドマの幼馴染。反乱軍のリーダーだった。ファミンで戦災孤児だったところをウォンと一緒にジンに引き取られてアムトに移り住んだ。アムトの方言になかなか慣れることができなかった。</p> <p>自分のことよりも他人のことばかり考えていた人で、戦災孤児の集まりだった集団を次第に一つにまとめていき、革命軍(彼の死後に反乱軍となったが)を作った。自警団員でもあったのだが、メイリンが産まれた時に引退して農家に転身した。革命軍のリーダーをしながら市街地の市民たちと融和する方法を考え続けて苦しんでいた。最後には【戦わずして平和は得られない。ならば戦いを誰かが一手に引き受ければ良い】という思想にたどり着いたが、ハンに邪魔だと思われたのか、命令を受けたウォンに殺されている。殺されるときは、ウォンが苦しそうだったのに対し、笑顔だったという。彼の死後に隠し部屋が見つかっており、中には大量のヴェノムナイフと毒の資料と反乱軍の行動計画や動向など、市街地の市民と融和する方法を模索していた跡があった。しかし、融和は難しいという結論に至ってしまった。</p>
<p>ズオン</p>	<p>故人。ヤンの名前をアムト風に発音した名前。反乱軍のリーダーとしてのヤンの名前だったと思われる。</p>
<p>メイリンの母</p>	<p>故人。十年前にメイリンを産んだ直後に病死。</p>
<p>ジン</p>	<p>ジン・リー。帝国語表記で『金』。街外れのグレートワンズの小ぢんまりした神殿の神官。自称アムトのジョニー・デップ。酒好きで胸が大好き。致命的に神官服が似合っていない。女の好みはおっぱいの大きさに左右される。</p> <p>元々はファミンにいたがそこで戦災孤児のヤンとウォンを拾った。ファミンで何かがあったのかアムトに移り住んでいる。傭兵を探していたハンと接触したこともあり、その時にウォンを紹介した。もとは裏世界の人間だったのだろう。彼の周りにヤンとウォンがアムトの街で戦災孤児を連れてくるので一時期は神殿が孤児院のようになってしまった。ウォンが反乱軍のリーダーだと気づいたのは、ルノアが神殿に現れた後だった。孤児たちが成長して互いに助け合うようになった時に彼の孤児院は役目を終えた。</p> <p>ウォンが死んだとき、ルノアとフィミアから死体を受け取り、静かに死を悼もうとしていたが、何度も人が押し掛けたせいで切れていた。</p> <p>最後は、街を出る一行をヤンとウォンと彼が描かれている小さな絵と一緒に酒を飲みながら見送った。基本的に俗世間とは距離を置く人のようだ。ファミンで何かがあったのだろう。</p>

ブルース	終戦祭当日、フィミアと一緒にチームを組む自警団員。犠牲が出ないに越したことがないという考え方。チームには他に、オールバック三つ編みで武道着を着ているレツという男がいる。
ジャッキー	終戦祭当日、エフェミアと一緒にチームを組む自警団員。チームには他に、管を巻いていた神官風の女、プリ子がいる。
リー	終戦祭当日、フラウカクロウのどちらかと一緒にチームを組む自警団員。
チェン	終戦祭当日、フラウカクロウのどちらかと一緒にチームを組む自警団員。
ドウジ	反乱軍のツンデレ少年。ルノアが最初に下層に降りた時に、大人から殴られていたのをルノアが治療した。それから病院送りになったルノアにメイリンが狙われていると教えに来たりして、少しだけルノアにデレている。弱者が強者に立ち向かうために毒はあると言い放ち、所詮、下層は市民たちと仲良くなることはできないと思っている。

寺院上層1F



寺院上層2F



待ち伏せ場所の図

